



Title	モンゴル 人と教育改革（2）：社会主義から市場経済社会への移行期の証言
Author(s)	小出, 達夫; KOIDE, Tatsuo
Citation	北海道大学大学院教育学研究紀要, 100, 167-219
Issue Date	2007-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.100.167
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/18868
Type	departmental bulletin paper
File Information	100_167-219.pdf



モンゴル 人と教育改革(2)

— 社会主義から市場経済社会への移行期の証言 —

小 出 達 夫*

Educational Reform after 1990 in Mongolia

Tatsuo KOIDE

【目次】

- I モンゴル教育省の改革と関係者の証言 (167)
 - 1 教育省改革の沿革 (167)
 - 2 教育省関係者の証言 (173)
 - 13 バトボルド 14 バタエルデネ 15 バンディ
- II 大学改革の沿革と関係者の証言 (181)
 - 1 大学改革の沿革 (181)
 - 2 モンゴル国立大学関係者の証言 (187)
 - 16 ドルジ 17 ダワー 18 バトフー
 - 19 ダルジャー 20 オユンツェツェグ 21 アマルザヤ
 - 3 モンゴル教育大学関係者の証言 (198)
 - 22 ナランツェツェグ 23 オユン 24 ダワージャルガル
- III 私立学校改革の沿革と関係者の証言 (204)
 - 1 私立学校の沿革 (204)
 - 2 私立学校関係者の証言 (205)
 - 25 ソユルト 26 オランチメグ 27 ガラー
 - 28 ミジド
- IV 職業技術学校改革の沿革と関係者の証言 (214)
 - 1 職業技術学校の沿革 (214)
 - 2 職業技術学校関係者の証言 (216)
 - 29 ユラ 30 バラエサム

I モンゴル教育省の改革と関係者の証言

1 教育省改革の沿革

(1) 1991年教育法

1991年教育法はモンゴル人民共和国（社会主義体制）がその崩壊以前に制定した最初で最後の教育法である。その中から特徴的な条文を紹介する。社会主義体制の中核をなしてきた政

* 北海道大学大学院教育学研究科名誉教授（教育行政学）

府が自ら社会主義体制を放棄したその最終段階で、いかなる原理の下に新たな教育システムを作ろうとしていたかがわかる。

「民主的で独立した生産的な教育行政システムが創出されなければならない。」

「教育大臣は教育に関する国の政策に従い、国および地方のすべての教育機関を管理する。」

「教育行政は民主主義と公開の原則に従い、一般国民や教師によって構成される審議機関を設置する。」

「公立学校には校長と教頭を置き、地方教育委員会によって任命される。」

「政府は、教師の自己教育や研修に向けて行われるあらゆる活動を援助する。」

「職業学校の生徒は入学試験により採用される。職業学校は自ら入学要件を決める。入学・採用手続きには専門家や企業主が参加できる。」

「会社や個人による私立学校の設置が援助される」

「教育システムは教育を社会の指導部門として発達させるため、教師・生徒・卒業生の社会的地位を改善する。」

これらの条文から読み取れることは、専制的な一党支配からの教育行政の解放、民主主義・公開・参加などの原則による新しい教育行政の創造、教師・生徒の地位の向上、私学設置の承認、行政の分権化、社会主義体制との決別などである。なおこの法律では教育省はまだ Ministry of Education であり、科学・文化は別の機関が所管した。

(2) 1992年の新憲法と教育省

社会主義憲法にかわる新憲法は、92年1月に人民大会議（国会）で制定された。この民主主義憲法に採用された教育条文を紹介する。

第2章第16条

7. モンゴルのすべての国民（citizens）は教育への権利（the right to education）をもつ。政府は、無償の中等教育（secondary education free of charge）をすべての国民に提供する。国民は、政府の定める規定に従って、すべてのレベルで私立学校を組織する権利をもつ。

第3章第38条

2. 政府公務員は、科学と技術の統一（unification of science and technology）を推進し、科学と技術を統一する計画を国会に提案する。政府はこの点に関連する国会決議の実現に責任をもつ。

第3章第39条

2. 首相は科学教育大臣（Minister of Science and Education）、他の大臣、他の政府メンバーを選考する。

3. 国会は、この提案を承認し、任命する。

国の主権が実質的にも形式的にも人民革命党中央委員会政治局にあった1990年以前と異なり、教育への権利が国民に帰すことをこの憲法は明示した。私学設置の自由も保障された。主権の所在が逆転した証しである。「科学と技術の統一」の原理は憲法原理としてはなじみのないものである。しかし社会主義政権下にあっては、大学は教育機関であり、研究機関はもっぱら科学アカデミーに専属し、研究と教育が分離していたのであり、この点を考えるとこの「科学と技術の統一原理」は積極的意義を持つ。新時代の世論の反映である。大臣の任命規定につ

いては、従来は大臣の選考・指名が革命党中央委員会政治局にあったことを考えると、この当たり前の規定も重要な意義を持ち、新しい時代の行政機関の構成原理として注目してよい。憲法上の規定からわかるように、この時点で教育省の名称は科学教育省に変わった (Ministry of Science and Education, MOSE)

(3) 内閣法 (1993・5)

内閣法の中から科学教育大臣に関係する条文を紹介する。

第4章第20条

1. 大臣は、科学・技術政策、関係するあらゆるレベルの教育政策に責任をおり、科学と技術を管理する政策を開発する。

第4章第24条

1. 大臣は内閣の一員である。
2. 大臣は政府政策を作成し、政府決定を実施する権限を持つ。
3. 大臣はその管轄に置かれるすべての機関の行政官を任命し、給与・人事・管理を含むすべての管理規則を承認する。
5. 大臣は科学と教育を管理する規則を開発し、その実現に必要な手段を組織する。

旧制度と比較し最も異なる点は、大臣およびその管轄する省が、人民革命党中央委員会政治局の決定事項の執行機関ではなくなった、という点である。政策の立案・執行過程においても、また省内人事の決定権においても大臣は独立した権限を持った機関になったのであり、その職員も政策決定過程に参加する力量を要請されるようになった。この点の違いは大きい。

(4) 1993年時点の科学教育省

新憲法下の科学教育省 (MOSE) は、従来の教育省が「教育政策の執行」だけに限定された機関であったのと異なり、「執行機能」のほかに新たに「教育政策・計画の策定機関」になった。それだけではなく従来もっていた多くの権限が分権化され、高等教育や専門教育については大学やカレッジに権限が委譲され、普通初等・中等教育については地方の県 (アイマグ) や市に権限が委譲された。人事・予算・カリキュラムを含めて従来中央に集中されていた教育機関の日常的な管理業務が中央からはずされ、地方や高等教育機関に移された。また中央に残されていたカリキュラム基準の作成や教員研修なども教育大学に移され、科学教育省の権限は、教育政策の作成、マスタープランの作成、それに基づく指導、教育成果の評価などに限定されることになった。

こうした変化に伴い、MOSEの内部組織にも変動があり、大学管理職を含む中央人事、予算の作成・配分などを含む2つの官房的機関と、省外事務 (初等中等教育、高等教育など中等教育後の教育、科学技術) を担当する3局とに分かれた。前者は執行機関としての性格が強く (Administrative Department)、局長としてDirectorが置かれ、後者は政策形成機関としての性格が強く (Educational “Policy” Department)、局長としてDirector Generalが置かれた。管理局 (Department of Administration)、経済福利局 (Department of Economics and Social Welfare) の2局は前者に位置づけ、就学前・普通中等教育局 (Department of Pre-School and General Secondary Education)、中等教育後教育局 (Department of Postsecondary Education)、科学技術政策局 (Department of Science and Technology Policy) の3局は後者に位置づく。

以上の5局のほかに、大臣直属機関として教育監査委員会(Inspectorate Board of Education)が1991年11月に新設された。これはすべての教育機関の基準を設定し、教育内容やカリキュラムの質の向上を図り、学校など教育機関におけるその活動実績をモニターし、標準テストを作成実施し、大学などを含めて教育機関の認証にかかわる機関であった。委員会には大臣任命の7人の委員が置かれ、これに35人の顧問団が付設された。それ以外に6人の中央監査官(各一人の監査官に3-5人のアドバイザーがつく)と、22人の地方監査官が置かれ、地方監査官は18の県と4つの市の監査を担当した。この人数はほぼMOSE職員の数に匹敵するもので、この時点ですでにその設置に対する疑義が出されていた。標準テスト、学校の認証、カリキュラムや教授基準の厳格な実施などは、中央集権的で権威主義的なかつての行政システムへの復帰ではないかという疑問である。こうした権限の厳格な実施は恣意的・専制的となり、学校の教師や大学の教授から表現の自由や学問の自由を奪うのではないかという疑義が出され、まもなくこの機関は別の機関に変わる。かつての中央集権的な機関が分権的な機関に変わるとしてもそう簡単には進まなかった例証でもある。

こうしてみるとこの時点でのMOSEの改革は、まだ流動的で、古い体質が残され、中途半端な改革に終わっていた、といえる。こうした状況をレビューし、新たな基本政策を提示したのが次に見る「人材開発教育改革プロジェクト・マスタープラン」(1994・2)である。

(5) 「モンゴル人材開発教育改革プロジェクト・マスタープラン(1994-98)」と科学教育省

このマスタープランは、1993年より新政府の下で原案が作られ、1992年の総選挙で新たに選出された国民代表議会で議論され、正式にモンゴル国の長期教育計画として国会で承認された基本的政策文書である。

マスタープランは、1990年以降の科学教育省の基本任務が、①科学と教育を統合し、②教育行政を分権化し、学校の管理責任を市と県の地方政府に移し、③高等教育機関に自治と自立を保障する、ことにあったことを確認する。しかしこうした変化を提唱してきたにもかかわらずMOSEは以前の教育省と同じ組織的な構造にとどまっている、とマスタープランは教育省の現状を批判し、科学教育省の組織改革と関連して3つの課題を提起した。

① 教育監査委員会は、標準テスト、学校の認証、カリキュラムの実施などで悪用され、恣意的に運用され、教員などの自由を制限する可能性がある。したがってこの委員会は、新しい使命の下に改組される必要がある。

② 教育人材開発システムと企業家との間に情報や計画化をめぐる連携を強化しないといけない。統制経済が終わり、新たに市場経済への移行が始まった。そのため市場経済に対応した人材養成の予測、不安定な労働市場への対応策、10年制学校の卒業生の進路追跡調査などをめぐってMOSE、労働省、NDB(National Development Board)、教育機関、企業などとの間の情報交流を緊密にしなければならない。そのために調整連絡委員会(Coordination Panel)を設置する。

③ MOSEの新しい任務に対応するために以下のような組織改革を行う。

1 国家教育審議会(National Education Council)の設置

このカウンシルは、財務・労働・厚生・文化・通産・エネルギー・建設・農業などの各省代表者、NDB、学長会議、鉱山・ビジネス・銀行・商業・農業など民間セクターの代表者、大学・学校の教員、司法関係者、地方自治体代表、労働組合、青年・学生代表などによって

構成される。会議は年2回開かれるが、運営委員会は毎月開催する。任務は、教育政策すべての事項や計画策定や政策分析、予算について大臣に助言し、マスタープランの実施や更新について援助する。

2 大臣主催の管理会議 (Minister's Administrative Council) の設置

これは大臣、副大臣、局長で構成する月1回の諮問機関である。任務として以下の事項が挙げられている。省内事務についての大臣への助言、各局の任務の調整、政策や計画策定について大臣への助言、新法の実施や省の政策変更、移行期における省の役割変更など重要事項の協議。

3 省内組織(局)の改革

省内組織を以下の6局とする。まず科学技術研究局、高等教育局、教育局を設置する。この3局は「アカデミックな事務」を扱うライン系列の局で、各局にDirector Generalを置く。人事サービス局、管理局、広報連絡局は「管理事務」を扱うライン系列の局で、ここにDirectorを置く。これらとは別に、スタッフ機能を持つ組織として管理情報サービス室、評価サービス室をおく。高等教育局には高等教育合理化委員会 (Rationalization Committee)、高等教育改革委員会 (Higher Education Reform Commission)、学長会議 (Council of Rectors) などの審議会が置かれ、大臣への助言にあたる。教育局の内部には就学前・中等教育課と職業・ノンフォーマル教育課を置く。

かくして省内には「アカデミックな事務」(省外事務)を扱うライン系列の組織と、「管理事務」(省内事務)を扱うライン系列の組織が区別され、それ以外に大臣の補佐機関であるスタッフ系列の組織ができた。また局に関連する事務の民主的執行のために各種の審議機関が設置され、科学教育省の新しい構成原理が提唱された。

(6) 1990年代後半の教育改革

90年代後半の教育改革の詳細な記述については別の機会にまわし、ここでは教育改革に関連する基本的な政策文書についてだけ紹介する。

① 1995年教育法 (The Mongolian Education Law) の制定

この国の教育を支える一般原則を確認した法律、初等中等教育および高等教育に関する法律にわかれる。新憲法制定後初めて作られた教育に関する体系的な法律である。この法律は1998年に一部改正している。(内容紹介は別稿)

② 教育セクター開発プログラム (Education Sector Development Program, ESDP)

このプログラムはアジア開発銀行 (ADB) が1996年に制定し、それ以降このプログラムに基づいてモンゴルの教育改革を援助した政策文書である。そこでは特に、中央・地方・教育機関の教育管理能力の伸長、高等教育の管理と学術発展との調整の改善、後期中等教育と高等教育の質の向上、職業訓練・技術教育の総合的計画のフレームワークの開発などが主要な目標とされている。

③ 1996年科学教育省(MOSE) は文化省と統合して科学技術教育文化省となった (Ministry of Science, Technology, Education and Culture : MOSTEC)

④ 「教育セクター改革 (1997-2005) のためのモンゴル政府基本命令」 (Main Directive of the Government of Mongolia for Reform in the Educational Sector in 1997-2005): 政府決定第89号, 1997

1995年教育法の実施に必要な行政措置について定めている。

⑤ 「21世紀のためのモンゴル・アクションプラン」(The Mongolia Action Plan for the 21st Century or MAP 21)：政府決定文書1998年

これはモンゴル社会の環境問題，社会福祉問題，自然・社会の持続的発展などを主要課題としているが，その中で特に教育セクターの重要性について触れ，次のような目的を具体化している。

- ・教育を例外なくすべての人にとって身近なものにする
- ・すべてのレベルで教育の基準と内容を開発する。そのための新しいモニタリングシステムを高度専門家と一般国民代表とによって構成する。
- ・モンゴルの持続的発展と高い雇用率を可能にする技術教育・職業訓練の新システムをつくる。
- ・環境問題，資源の効率的利用，エコロジーについて学校のすべてのレベルで推進する。

なお，このアクション・プランは，1998年以降の政権不安定状況（民主党中心の連合内閣が1年単位で総辞職・交代を重ねる）により，その実現はむずかしかった。

⑥ 「中期社会経済発展戦略1999-2002」(Medium Term Economic and Social Development Strategy, 1999-2002)，1999年6月政府文書

これは1999年の前半を費やして作られた政府の戦略政策文書である。ここには開発戦略の二つの主要目標が描かれている。第1は，開発戦略の主要目的が経済成長の加速化にあり，第2にはそのための人材資源の開発が重要な中期目標になる，ということだ。モンゴルでは90年代を通して，社会主義時代には経験したことのなかった貧困問題が深刻化し，その克服が社会経済発展計画の中心課題に登場してきた。貧困家庭への直接援助といった対症療法的な改善策ではだめで，基本的な克服策は経済成長にあり，それを実現できる人間の形成が社会経済発展計画の中心課題として認知されたという点で注目している。

- ・「新教育システムの開発は政府の優先事業のひとつである。政府は進行中の教育改革を加速し，訓練プログラムの内容や教材を改善する。」
- ・「より注目すべき点は，ノンフォーマル教育や遠距離学習プログラムの開発であり，教育サービスの供給の多様化や教育管理の分権化など現在進行中の合理化や生産性の向上を完成することである。」
- ・「社会サービス民営化法の成立は，国営高等教育機関，学校，児童施設その他の社会サービスを民営化する法的基礎をつくりだすものである。」

⑦ 「モンゴル教育セクター戦略2000-05」(Mongolia Education Sector Strategy, 2000-2005) 政府決定第20号(2000・2・2)

教育省は1999年をはじめ21世紀のための戦略文書を作るべく94年のマスタープラン以降の教育セクターの展開をレビューし，新たな教育戦略課題を23項目にまとめた。これは7サブセクターごとに1ないし6項目の個別戦略事項を優先順にまとめ，各項目に必要な予算規模を明示し，かつ23項目全体の中の優先順位を第1位から第10位までに割り振ったものである。ちなみに第1位は教育省に関する課題で，「教育省の戦略計画のサイクル」を各年度ごとに作成するというもので，予算規模は小さいものの(2万USD)，政策年度ごとに教育省の課題を5年間にわたって構造化して明示することを強調したものである。従来も年度ごとの重点政策については重視してきたのであるが(たとえば1997-2005年にかけて

の「教育セクター改革のための政府主要指示」などには戦略の計画化についての言及は見られなかった。「戦略の計画化」について長期にわたり明確な枠組みを提示できず、「戦略計画の不在」という状況があった。教育省は政策の優先順位を明確にせず、地方政府や教育機関は政策の優先順位を知らされず、教育関係統計が集まってもそれが政策決定に反映されず、政策順位があってもそれが予算措置と結びつかなかった、といった弱点が教育省にはあった。こうした欠陥を克服しようとしたのが、この「教育戦略2000-05」であった。

なお第2位以下は次のようになっている。第2位：遠距離教育のネットワーク作り、第3位：技術教育職業訓練と労働市場との結合、第4位：教師と管理職の研修、第5位：カリキュラムと教授法・教育内容の改善、第6位：教育基準の確立と教育評価、第7位：科学技術の統合と科学と教育の共同、第8位：高等教育の管理と財政の改善、第9位：高等教育の効率的な政策形成、第10位：学校・大学の施設設備の改善。

予算規模では、第10位に位置づけられた施設設備の改善がトップであり、ついで第4位の教員などの研修がそれにつぐ。予算規模は政策順位により決められるよりも、対象事業の規模によって左右され、また国際的ドナー機関の援助額を予定する上で重要となる。この戦略文書は、外国ドナー機関との間に戦略課題の構造的な位置づけについて合意を取り付ける上で重要な文書になった。

[参考資料]

Mongolia Education and Human Resource Sector Review, 1993, Government of Mongolia
Mongolia Human Resource Development and Education Reform Project, Master Plan, 1994, Government of Mongolia
Foundation of Education Sector in Mongolia and its Development in 80 Years, 2001, MOSTEC
Sub Regional Cooperation in Managing Education Reforms, Country Study: Mongolia, 2002, Asian Development Bank

2 教育省関係者の証言（人名前の番号は前回からの継続番号）

13 バトボルド(Gombosuren BATBOLD 教育省初等中等教育局長)

私は1948年スフバートル県スフバートル・ソムに生まれた。遊牧民の子供だった。兄弟6人で、長男だった。遊牧民の子供がすることをすべてした。馬に乗り、家畜を飼い、子家畜を育て、自然と付き合った。そして1956年、8歳のときソムの学校に入った。当時ドロップアウト率は高かった。私も9月1日の入学日になっても学校に行かなかった。そのうちに校長が家に来て、15日になってから学校に行った。校長が来なければ家にいたまま遊牧をしていた。2週間遅れて入学したので最初は成績も悪かった。その後よく頑張り、遅れを挽回した。学校へは馬に乗って通った。

中学はアイマグセンターの学校に入った。ソムには中学がなかった。同級生の半分は遊牧民になり、半分がアイマグセンターに出て中学生となった。私の父は日常生活用品を扱う店を開いていた。なんでも屋で、遊牧民に必要なものを斡旋していた。私は2年のときから算数を学

び、中国式のそろばんも習い、父の助けをした。高校までそろばんで父の商売を助けた。おかげで数学が好きになった。父はアイマグセンターでも商売をした。牛乳・小麦・野菜・服などを売った。夏休みになると私は朝7時から夕方9時まで店員をした。こうして小さい頃より生きる力を身につけた。

中学・高校の成績は平均すると普通よりは良かった。特に数学・物理・化学が好きだった。この教科では一番だった。オリンピックが始まり各アイマグより全国大会に出た。私も参加した。モンゴル国立大より招待状が来て1966年国立大の数学科に入った。大学は5年間だった。「数学研究者・教員」の資格を得て大学を卒業した。

1971年大学卒業後私は地方に戻りスフバートル県で数学の教員になった。バヤンデルケル・ソムの8年制学校だった。妻と70年に生まれた娘を連れて赴任した。この学校は大変だった。冬は牛糞を燃料にして、壊れたストーブで暖房した。部屋中煙だらけだった。フェルトの靴を履き、羊の毛皮の帽子をかぶり授業をした。展示資料なんかも壊れたままだった。この学校で75年夏まで4年間勤めた。学校の仲間の教師は良かった。ここでいろいろ学んだ。地方の生活とは何か。何を考えたらいいか。これらは今も役にたっている。

75年アイマグセンターの第1学校に移った。しかしこの学校の質は悪かった。だからいい先生を集めて学校改革をしようとした。ここで83年まで8年間勤めた。3回卒業生を出した。だから教え子はたくさんいる。アイマグ優秀教員賞ももらった。ロシアの教育内容も研究した。教科書も書き始めた。主に高校生の授業を担当した。1984年には第9学年の教科書を書いた。これは今でも使われている。全国教員発表大会でも報告した。1983年にはこの学校の教頭になった。教員との対話を始めたが1年間だけだった。

1984年スフバートル県の教育局長にさせられた。34歳だった。8月に任命され局長室に入り、すぐ教員会議を指導しないといけなかった。失敗もした。当時教員は1箇所にも4-5年いて異動した。だから教員の人事にもあたった。あるときは夫婦を違うソムに任命し、批判された。

当時学校は安定していた。環境も良かった。教員の社会保障もよかった。各学校は自動車を持ち、家畜を飼い、農業や小企業もやっていた。保管庫もあったし、お湯も出た。学校に1日中いて、午後の自由時間を教師と生徒と一緒に過ごした。夏は全国にサマーキャンプ場や労働キャンプ場があり、乳搾り、小麦や野菜の栽培、乾草作りなどをして、子供は有意義に過ごした。高校生になると9月1日より2週間郊外に出て干草作りや家畜の世話、柵など作った。自給自足を図る教育をした。学習の遅れは冬に挽回した。こうした事は大事なことで、今もそのニーズはあるが、やっていない。この機会に生徒同士は互いに知り合い、自然を知り、大人にさせる事ができた。教員と生徒が協力し合えた。こうした事は90年以降なくなった。

90年以降学校は荒れてしまい、私は92年に「教育局長を辞めたい」と申し出た。やめて若者の仕事をつくりたかった。技術職業学校を作り校長となった。しかしアイマグセンターからサポートがなかった。知事からは授業料を取れといわれ、けんかして2年間でこの学校はつぶれた。1994年春、私は一人でウランバートルに出て小学校教員カレッジ(国立師範学校)の教師になろうと思った。しかしある日スフバートルの県知事によれば、もどって教育センター(教育局)長になれと言われた。こうして94年にセンター長になり、2年間勤めた。いろいろやった。新しい教員グループを作ったり、指導主事を増やしたり、人事を変えたりした。教育省からは、検査結果が悪いので生徒の成績を上げろ、といわれたりした。ところが1996年の

選挙で民主党が勝ち、県知事や副知事が民主党に代わった。私は97年1月17日に急に首となった。

96年選挙で民主党が勝ち、秋には教育省の大臣はルハクアジャブとなった。義務教育局長はバートルゾルジになった。普通教育課長はバタエルデネだった（証言3）。バートルゾルジは革命党でそれ以外は民主党だった。私が首を切られて5日後教育省より電話があり、新しい普通教育課をつくるのでその専門官になってほしいと言われた。民主党の知事が私を辞めさせ、民主党の大臣が私を拾った、という皮肉なことになった。私は2月12日にウランバートルに出て、翌13日より教育省で勤めた。

こうして1998年に教育省モニタリング局のシニア専門家になった。これを2002年4月までやった。この間多少暇もあったので教科書作りなどもした。2002年4月からは初等中等教育局長になった。この後のことは小出さんも知っているとおりで。

私は1983年3月に人民革命党の党員になった。その年5月には教頭になり、ついで局長になった。当時革命党は社会主義から共産主義になると言っていた。しかし私は信用できなかった。社会は進歩せず、一箇所にとどまっていた。これに私は迷っていた。私は政党で人を差別しては駄目だと考えていた。また革命青年委員会にも参加しなかった。そんな事もあり、私は革命党の下でも民主党の下でも勤めることができた。

1989年12月よりペレストロイカが始まった。当時私はモスクワに1ヶ月行っていた。90年になるとスフバートルでもペレストロイカが始まった。私は参加しなかったが、この運動に反対しなかった。おきるべくしておきた事だと思う。両方に平等に付き合った。

90年以降の社会は社会主義時代のいいところを捨ててしまった。責任や役割が薄くなった。たとえば教員をニーズのあるところに派遣できない。これでは地方をよくすることができない。やる気のある人が少なくなってしまった。スフバートル時代の校長はほとんどいまウランバートルに来てしまった。「少なく勤め、お金をよけいとりたい」といった風潮だ。あまりに解放しすぎた。社会主義時代はいい教育をつくろうと計画化できた。今はできない。大学も2-3部制でお金を集めればいいとなった。もちろんいい面はいっぱいある。いいたいことを言える。地方分権にもなっている。私立学校もできる。しかし問題も多い。

(小出コメント)

バトボルド初等中等教育局長は私が2003年にモンゴル教育省の行政アドバイザーとして赴任したとき以来私の実質的パートナーだった。そして2004年政権が変わり、内閣や教育大臣も代わってからもなおこの局長ポストに就いている。局長になったのが2002年4月だから、すでに4年以上になる。これは教育省の中でもまれなケースで、それだけ彼はこの間の教育改革にとって不可欠な人物だったといえる。今回のヒアリングでは局長になる以前の経歴を中心に聞いた。ほかの局長とはどこか違った雰囲気を持つこの人物の人となりにも触れたかった。

バトボルドはモンゴル東部に位置するスフバートル県出身だ。この東部地帯はモンゴル国の中でも教育の遅れた地方だといわれてきた。彼は普通の遊牧民の子どもであり、遊牧民のするすべての仕事を経験し、伝統的な遊牧文明に接していたが、父親は遊牧民に必要な日用品の商売もしていた。このように父親は都市と地方の往復をさせていただきバトボルドの世界は広がった。

モンゴル国立大学で数学を専攻し、卒業後出身地のスフバートルにもどり、13年間中等学

校の教員をし、その後県の教育局長になり、90年政変のあとの2年間を含め8年間このポストについていた。かくして彼は社会主義時代のほぼ20年間、学校現場と県の教育行政職のトップを経験したことになる。

彼はこの期をなつかしく振り返る。学校の施設・設備も整備され、子ども達は終日教師と楽しく過ごし、夏休みはサマーキャンプ場や労働キャンプ場で遊牧生活を大人とともにする。生徒同士はお互い知り合い、自然と接し、大人と労働を共にする。こうして子ども達は大人へと成長していく貴重な機会をもった。社会主義時代の学校へのこうした評価は、バトボルドだけでなく、多くの教育関係者から聴いた。深刻な問題を抱える現在の教育状況に比べると、こうした1990年以前の教育への評価は当たっているだろう。

しかしこうした状況は社会主義教育がもたらした積極面だと評価していいのかどうか考える余地がある。もしかするとこうした積極面は社会主義がもたらしたというより、もっと古くからのモンゴルの伝統文化である遊牧文明とかかわらして考えるべきものかもしれない。90年以前の学校には多様な側面があるはずで、社会主義的要素だけで判断すべきではないであろう。この論考の(1)で紹介したドヨド教授の話の中にはこうした視点があった。彼は19世紀モンゴルの高僧ダンザンラブジャの事例を引き合いに出して、モンゴルの教育を考える場合モンゴル仏教の伝統を重視すべきことを力説した。おそらくモンゴル仏教の伝統だけでなく遊牧文明の伝統をも含めて、モンゴルの教育史を振り返る必要がある。またこうした伝統に自覚的な視点から現在の教育改革の課題と新しい可能性を見出す視点が必要となろう。これはバトボルドのヒアリングを通して後日考えたことである。

1990年以降のバトボルドの経歴にも示唆的なことが多い。90年以降の財政危機下での市場経済への移行は、学校教育でも多くの問題を引き起こした。バトボルドは92・3年の時点でもっとも深刻化した教育の劣悪状況と教育政策の無策に見切りをつけて、教育局長の職を辞任する。そして青年に職を与える教育を構想する。当時国営企業の多くが払い下げられ、資金や原料不足から倒産し、失業者を生み出した。こうした状況の中でバトボルドは職業教育の重要性を訴え、無償の職業訓練学校を作った。しかし県知事からは授業料をとれといわれ、2年でこの構想はつぶれ、自助努力を原理とする市場経済化の負の側面を彼は思い知らされる。

96年の選挙で政権政党が人民革命党から民主連合政権に移り、彼は復職していた県教育局長のポストを失う。彼を含め90年以降も人民革命党員のまま行政職についていた多くの公務員はこのとき職を追われることになる。その意味では公務員の政治的中立という考えは未確立で、政権政党の交代による獵官制が校長職を含めて教育界には見られた。バトボルドは幸い民主連合に属する教育大臣の下で教育省に採用された。これは珍しいことで、彼自ら言うように「政党で人を差別してはだめだ」という彼のもつ信条とこの人事は無関係ではないように思われる。こうした彼の特殊な側面が認められ、2004年の政権交代期においても彼は初等中等教育局長の席にとどまった。安定した教育改革を推進する意味において、地方で20年以上にわたる教員や教育行政職の経験を持ち、政党からも距離を置くバトボルドの存在はこの期の教育改革において評価されるべきものといっておくべきだろう。

最後に彼は「90年以降の社会は社会主義時代のいいところを捨ててしまった」という。しかし彼が言う「いいところ」が果たして社会主義によるものかどうかは、先に触れたように吟味を要する。場合によれば彼の言う「いいところ」は遊牧文明と関連させて評価したほうが、今後の教育改革の展望から言っても的を得ているのかもしれない。これはこのヒアリングから

得た新たな仮説のひとつである。

14 バタエルデネ (2) (Regsuren BAT - ERDENE 高等教育局長)

前回について、90年直後の数年間のことを話したい。90年代は短い間にいろんな改革をしようとしたし、それが現れた。89年には高等職業委員会と科学技術委員会は一つの組織をなしていた。90年になり国民文化省ができそこに高等教育部と職業教育部ができて、高等教育委員会はこちらへ移り、科学技術委員会は開発省に移った。

社会は混乱しており、国民は新しい政府は何をするのか、研究所や大学その他の機関は何をするのかを心配して見ていた。こうした事態が90年代の民主改革を推し進めた。90年選挙⁽¹⁾でできた新政府は革命党と民主党の連合政府で、バヤンバスレンが総理大臣、オルタナサンが教育大臣だった。オルタナサンは革命党の専任職員だった人で教育分野の経験はなかった。いまユネスコの事務次官をしている。副大臣がエンヘトブシンで、私にとってはこの人が改革の師だった。新しいものを理解し支援する人で、将来の展望を持ち戦略的な企画者だった。この人がいたから国際ドナー機関もモンゴルの教育に目をむけた。90年には新しい職員が教育省に入ってきたし、組織や職責もかわった。たとえば私も教育省に移り、教育や科学技術の企画調整という新しい職場に移った。エンヘトブシンは今は教育省の科学技術局長で教育アカデミーの副総裁だ。

省内の仕事の仕方にも変化が見られた。命令されてやるのではなく、政策作りに職員は参加できるようになった。省の政策や方針が重要となり、国民もそれを見るようになったし、省の方でも国民の理解を得ることが重要になった。こうした変化は91年の初めての教育法作りに反映した。いま教育大の教育行政室にいるプレブドルジがワーキンググループのリーダーとなり、ワンチグスレンが学校組織や指導法関係の立法に当たった。この法律は非常にリベラルな内容で、国は基準だけを作り、後は学校や国民に任せておけば国民自らや親達の努力でよくなるだろう、といった考え方だった。学校組織でも第9学年に特修コースを設置する事が可能になり、学校の公開が進められた。

私はまだこの2人のような考え方は持っていなかった。最初はロシア、東ヨーロッパをはじめ外国の事情や情報を集め提供していたが、92年以降は高等教育の行政分野に参加した。副総理大臣にダワーガンバルト（前モンゴル国立大教員・経済学）がいて、90年にこの人が高等教育分野で新しい改革を唱道した。8月には韓国・日本、フランス・イギリスに職員を派遣した。日本にはアマルジャルガル（国立財務カレッジ教員、後の総理大臣）、ダンバダルジャ（のち在日モンゴル大使、国際コンサルタント）、バタジャムニャム（現在教育省職員）などが派遣され、英仏にはバタチュengel（当時モンゴル国立大経済学部副学部長）、スフバートル（当時国立市場経済大学、今アメリカ・ベンシルバニア州立大）、それに私が派遣された。オックスフォード大学などを視察し、帰国後国立大の経済学部や市場経済大のテキスト作りや国際基準の達成などに努めたが、テキスト作りは大変だった。そのほか、教育省内で英語を知っていたオンドロハやロシア語のマシピレグが中心に大学に始めて英語を導入するため、ロシア語教師の再教育を図った。また“モンゴル化”が叫ばれ始めており、教育大のジャダンバを中心にモンゴル文字の復活を進めた。これら英語やモンゴル文字の導入は新たな教育現象だった。

90年代大学改革に貢献したピッツバーグ大のスポールディングは87年に初めてモンゴルに came。これはそれ以前に新設されたホブト大学にユネスコが援助し、そのモニターをするため

当時ユネスコで教育局長をやっていた彼が来たのだ。私が彼にはじめて会ったのは90年6月だった。91年以降彼が指導するようになってから高等教育の改革は形を成してきた。

エンヘトブシンの発想で、高等教育改革委員会がナショナルレベルでできた。国会には小国会ができて国会の常置委員会となり⁽²⁾、憲法制定会議の機能を果たし、緊急の場合は立法活動もした。91年教育法はここが制定した。小国会の議長はゴンチグドルジ（国立大、数学）で、ここが高等教育改革委員会の長を指名した。長はハタンバートルが指名された。これにより改革後初めて高等教育の決定機関ができた。そしてこの委員会の長は教育大臣の指名ではなく、国会附属の小国会の指名するところとなった。従来はソビエトや革命党の決定が高等教育を左右したが、これによりモンゴル人の話し合いで事柄が決まるようになった。

高等教育委員会にはその活動のために財団がつくられ、寄付を集めたり、シンポジウムや研究会を開いた。委員会メンバーは各省庁の副大臣などで構成された。私はそのメンバーではないが、スタッフとして調整機能を果たした。財務関係は当時市場経済大学長をしていたスフバートルが果たした。彼は以前貿易省の局長をしていたので適任だった。

90年に東京でモンゴルへの援助会議を開いた⁽³⁾。この会議で「モンゴルの高等教育の現状」を報告した。援助のプロポーザルをスポールディングが書いて提出したが、援助をする国はなかった。そこで彼はこの報告を二つに分けて、①モンゴルの高等教育の現状と調査結果の具体化、②モンゴル高等教育機関の人材開発、としてADBやアメリカ政府に提出した。92年にADBの小西がやってきて、ニーズ調査をした。私もこの調査についていったが、92年の総選挙で革命党が72議席を獲得し、政府はそれまでの連合政府から革命党の単独政府となり、首相はウルジホトグに変わった。小西は新首相に調査結果を報告し、高等教育だけでなく、教育セクター全体の調査が必要で、将来のナショナル・プログラムの作成を提言した。

他方スポールディングからはモンゴル高等教育機関の人材開発をピッツバーグ大学が担当する事になったからその人材を派遣せよという連絡が入った。第1次派遣は、人文大学学長のチョロンドルジ（後教育大学長）、エンヘトブシン、それに私が派遣され、第2次派遣にはゴンチグドルジ、ダワー（いま国立大副学長、証言17）、ドルジ（国立大学長、証言16）が、第3次派遣にはトムルオチル（証言2）などが派遣された。大学も独自に国際交流を始めだした。科学技術大のバトルジは熱心で、特に日本との交流を盛んにした。森戸辰夫や鈴木なんかが日本側の中心になった。科技大は大学改革のモデル校の役割を果たしてきた。

(注) (1)90年選挙：1990年5月に改正された修正憲法により7月29日に実施された国会選挙（国家大会議）である。国家大会議の議員の選出と、小会議の構成のために政党別の支持率を明らかにした選挙だった。議員選挙では人民革命党が全議席の84・6%を占め、民主党3・8%、民族民主党1・4%となった。支持政党では人民革命党が61・7%を獲得し、民主党24・3%、民族進歩党6・0%、社会民主党5・5%、自由労働党1・2%、緑の党1・2%となった。

(2)小国会（国家小会議）：90年5月の修正憲法により人民大会議の下に設置された常設の立法機関であり、特に新憲法案を作り大会議に提案する権限を持たされた。

(3)モンゴル支援国会議：ここに言う90年に開かれた援助会議とは91年にはじまるモンゴル支援国会議のことと思われる。これは日本政府と世界銀行が共同議長となりモンゴル支援各国と国際支援機関からなる国際会議であり、現在も続いている。

(小出コメント)

これは前回のヒアリングに続く2回目のヒアリングである。彼の記憶は正確でかつ詳細である。今回は1990年、91年の高等教育改革を中心に聞くことが出来た。主として90年7月の総選挙後に出来たビヤンバスレン政権(92年まで、人民革命党中心の連合政権)下での教育改革についてヒアリングした。バタエルデネのヒアリングでたびたび出てくる名前がエンヘトブシンである。省内にあって90年の改革を推進した中心人物であったようだ。エンヘトブシンについては別の機会にヒアリングを予定している。

今回のヒアリングでは90年過ぎの教育省の変化の様子が伝わってくる。バタエルデネ自身の経験として次のようなことを語っている。教育省の職員が政策作りにかかわれるようになったのははじめてだ、省内での日常的な執務においても国民のことを考えるようになった、高等教育改革委員会の設置でわかるように国の政策作りや教育省の政策作り国民がはじめて直接参加できるようになった、91年教育法に現れている考え方として国は教育の基準を作り、中央行政は出来る限り教育現場に介入せず、基準の実施を地方に任せるようにした、などである。こうした考え方は確かに90年以前ではまずありえないことで、バタエルデネ自身も自己変化をしながらこの教育省の改革過程に参加していることがわかる。

最後のほうで彼が言っていることであるが、90年直後の変革期においてモンゴル教育省と日本との交流が意外に多く、日本側の相当の人がモンゴル教育改革にかかわっていたことがこのヒアリングからわかる。バタエルデネは現在でも日本の関係機関の会議や学会などに出席しているが、そういう意味でも彼は重要な役割をはたしている。

15 バンデイ (Radnaa BANDII, ADBモンゴル支部プロジェクトマネジャー)

私はウランバートルで1956年に生まれた。兄弟7人で、長男だった。父は経済が専門でウランバートルの役所で働いていた。90年に65歳で役所を辞めた。私は父の影響を強く受けた。父や祖父はモンゴルの発達のため将来のことを考えていた。社会主義下では5年毎の計画を立てられ、各期はそれぞれ特徴を持っていた。60年代はネグデル、70年代は職業教育の発展などに特徴があった。

私は75年に10年学校を卒業し、国立大の経済に入った。しかしその後モスクワ大の経済学部に入学し、82年に卒業し、帰国後教育省に就職した。計画経済課だった。この頃ロシアの大学を卒業した人が教育省に多く採用された。

その後は高等教育計画課、高等職業教育国内委員会など省内の部局を歴任し、主に高等教育の開発、プランニング、人材のニーズ調査、人材開発、などに従事した。91年から国立教育研究所に移り、教育行政・管理・財務などを担当し、副所長もした。94年に教育省に戻り、政策教育局長を94-96年の2年間やり、96年にADB(アジア開発銀行)モンゴル事務所の教育セクター開発局長となり、現在に至っている。この間に、100本近く論文を書き、91年にはモスクワ大でPh. Dを取得した。また4人の博士論文を指導し、30人以上の修士論文を指導した。現在は教育科学アカデミーの副総裁をしており、職位として教授の資格を持っている。

私は職業教育にも関わってきた。80年代には3つのタイプの職業学校があった。一つは技術職業学校で、散髪、洗濯、菓子作りなどで中卒後2年間だった。二つ目は技術中等学校でテクニシアンを育てた。中卒後3年間で高校卒業資格も取れ、大学へも入れた。三つ目は専門職

業学校で、高卒後2年間、中卒後4年間だった。今の Junior CollegeでDiplomaの資格を取れた。この専門職業学校は全国に26校あり、貿易(UB, ザブハン), 建築(UB, ダルハン), 農業(ドンドゴビ, ドルノゴビ, オブス, ホプト), 鉱山(エルデネット, ダルハン), 水産(ダルハン), 医科(UB, ドルノド, ゴビアルタイ, ダルハン), その他通信, 文化, 食品などがあった。これらは地方に軽工業を起こす重要な条件になっていた。90年以降は専門職業学校は大学への昇格を希望し、貿易産業大, 経済大, 水産農業大, 師範大などに代わったところもある。これらの専門職業学校は90年以降もつぶれてはいない。これが高等職業教育に相当する。89年までの教育省内の職業教育担当組織は、局(3人)も部(5人)もあった。それ以外に職業教育指導研究センター(5人), 職業担当研究部(5人)などの組織もあり、充実していた。

私は90年以降は主として高等教育の改革に関わった。大学援助が90年以前にユネスコからあり、86年にユネスコから Spaulding 教授(ピッツバーグ大学)が援助のモニタリングのためモンゴルに派遣された。私はそのとき初めて彼にあった。この頃はユネスコ関係でポーランド, ロシア, ハンガリーなどの社会主義国からも職員が派遣されてきた。

その後90年過ぎになり、スポールディングは再度来て、高等教育分野でモンゴルの改革を援助した。93年には教育セクターのマスタープランが作成されたが、高等教育分野を彼が援助し、私も作成に関わった。90年初期にはこれ以外オーストラリアのニューイングランド大学のパトリック管理学部長とも協力し、エダブ国際開発団の援助で私とパトリックそれに日本の栗本の3人であるプロポーザルを提出する事になっていたが残念ながらだめになった。日本からは広野(専修大)が経済改革分野で援助してくれた。私は93年にユネスコの国際教育研究所に出向き、教育行政関係や英語の研修を受けた。

A DBに移ってからは教育改革推進のための物的人的条件の改善に努めてきた。200校にわたる校舎の改築にかかわり、60万人の子供のうち2人に1人はADBの関連工事で改修された校舎で勉強している。97年までは知られなかったパソコンも最低でも1校当たり少なくとも5台、多くて60台が普及されている。教科書の発行も援助し120種類の教科書中50%以上はADBの援助による。大学のテキストも70冊以上援助した。中等学校には2万人の教員、行政職員がいるが、延べ3万人の再教育にも関わった。大学関連では200人以上の教員が20カ国に行き再教育を受けてきた。97年より私がADBに移って仕事を始めてからで見ると4500万ドルをADBで支出した。これは国費の教育予算のほぼ4分の1に相当する。ノルディックの予算を入れると5500万ドルに登る。実質的には第2の教育省のようなものだ。

いまモンゴルの教育課題を考えてみると、第1には地方の学校の教育条件の改善、特に寄宿舎の建設が必要だ。第2には職業教育の改善、第3に情報教育、第4に大学の組織の改革、特に学位の国際基準への引き上げ、などが考えられる。これからのモンゴルの教育改革は外国の真似では駄目で、モンゴル独自のものを作ることが必要だし、それをできる力はある。現在行われている新しい実践を交流しあう努力が必要だ。教員の意識の遅れや学校管理がうまくいってないところもあるが、まねではない自分達の努力が求められている。

(小出コメント)

バンディはアジア開発銀行のモンゴル事務所の教育セクター開発局長で、モンゴル教育省に常駐し、教育分野におけるADBのモンゴル援助や融資事務に携わっている。彼も言うようにADBの援助・融資はモンゴル教育予算のほぼ4分の1に匹敵する規模で、ADBの援助なしに

はモンゴルの復興はありえなかった。彼は財政面で教育省の事業を支えてきており、そういう意味では教育省の幹部職員の一入である。

今回は彼の現在の担当事務であるADBについてではなく、ADBに移る以前の経歴について主としてヒアリングした。彼は1982年にモスクワ大学の経済学部を卒業し教育省に入った。経済出身の教育官僚はモンゴルでは異色だ。そんな関係もあり彼は90年までは教育省で職業技術教育を担当した。今回の話から80年代のモンゴルでは職業技術教育が重視され、教育省の中でも中心部局のひとつだったことがわかる。90年過ぎの職業教育の凋落ぶりとはまったく逆であったことがわかる。90年過ぎにはバンディは高等教育の担当になる。90年以前の技術専門学校いくつかは大学に再編される過程に彼はかかわったのであり、モンゴル職業技術教育史の中の重要な一こまに彼はいた。

II 大学改革の沿革と関係者の証言

1 大学改革の沿革

(1) 1990年以前の大学

モンゴルで最初にできた大学はモンゴル国立大学 (Mongolian State University) で、1942年に創立された。当時設置された部局は学部というよりも学科 (department) であり、教育、医学、獣医の3つであった。

このうち教育学科は、当時初等中等学校で急増していた教員を養成するために設置されたが、1951年には国立教育専門学校 (State Pedagogical Institute) に改編され、モンゴル国立大学の中で相対的に独立した。これは専門中等学校 (specialized secondary school) に位置づく学校で、中等後の教育機関 (post secondary education) であったが、高等教育機関には入っていない。ついで1957年に国立教育大学 (State Pedagogical College) と改名され、高等教育機関となった。

獣医学部 (zoological - veterinary medicine faculty) は、1958年に農業研究所 (Agricultural Institute) に改編された。これは当時すでにあった国立科学委員会 (National Committee of Science) とモンゴル国立大学の一部研究者の間で、モンゴル国立大学に教育プログラムだけでなく研究プログラムの課程を創設しないといけないという点で一致し、教員の一部を半ば自治的で研究機能を持つ機関に移すことが決められ、こうして出来たのが農業研究所であった。国立科学委員会は59年にはモンゴル国立大学と融合し、こうして研究と教育の統一した機関が大学内部に作られたのであり、これは当時の高等教育機関の大きな前進であった。

しかし、1961年に国立科学委員会はモンゴル科学アカデミーに改編され、国立大から独立した。こうして研究機関は大学から相対的に自立した科学アカデミーの研究所に移された。また科学ドクターなどの学位もアカデミーが出すこととされた。

モンゴル国立大学のその後の動きを追ってみる。大学の医学部門 (Medical Faculty of the State University) は1961年に医学部 (Medical Institute) になり、大学内で自立した機関となった。工学部門 (Polytechnical Faculty) は1969年に作られたが、1982年に工学部 (Polytechnical Institute) となった。ロシア語教員カレッジ (Russian Language Teacher's College) は1979年に作られたが、1982年にロシア語研究所 (Russian Language Institute) として自立した。こうして大学の1部門 (faculty) として出発した各専門分野の教育機関は名称を変え、大学内

でも自立した学部 (Institute) になり、1990 年の改革期を迎えた。(この間の詳細は、小出：「モンゴルにおける高等教育改革」を参照。北海道大学生涯学習研究部『大学教育改革における大学・地域パートナーシップの開発過程に関する国際比較研究』, pp. 183-187, 2006・3)

(2) 1990 年代はじめの大学の設置

1990 年以前にはモンゴルにはひとつの大学 (モンゴル国立大学) しかなかった。しかし 1990 年の後半から始まった改革の中で、まずモンゴル国立大学の 4 つの学部 (Institute) が独立し、正式の大学 (University) になった (1991 年)。モンゴル農業大学、モンゴル医科大学、モンゴル技術大学、モンゴル教育大学である。ロシア語研究所は外国語研究所 (Foreign Language Institute) となり、教育大学に付置された。なおモンゴル国立大学は、名称を Mongolian State University から、National University of Mongolia (NUM) に変わった。

以上のほかに科学アカデミー付属研究所や旧制専門学校 (post secondary school) を核としていくつか新制大学が作られた。前者に属するものとしては、モンゴル技術大学 (Mongolian Institute of Technology) が 1991 年に作られた。従前のモンゴル運輸通信省所管の運輸研修所 (Transportation Institute) はモンゴル科学技術大学の一部になり、ザブハンの経済カレッジ (Economic College) はモンゴル国立大学に所属し、ドルノゴビとゴビアルタイの医学カレッジ (Medical College) はモンゴル医科大学の付属教育機関となった。軍事研修所 (Military Institute) は軍事大学 (Military University) に、芸術研修所 (Art Institute) は芸術大学 (University of Art) になった。

以上のような国立教育機関の大学への再編とは別に、私立大学の新設が可能になり、1991 年 4 月には最初の私大が教育科学省 (MOSE) によって認可された。1993 年 3 月までに 18 大学が認可されるという急増ぶりであった。とはいえ認可当初の教員数は 10 人以下が圧倒的で、学生数も 100 人から 300 人という状況であった。

こうした大学の設置認可にあたって、MOSE は高等教育機関のアクセディテーション基準を作成した。これはアメリカで開発された基準を参考にしているが、モンゴルの事情に合わせてなかみを変えている。設置認可に当たっては、第 1 に、大学を National University, University, College のいずれかに類型化しなければならない。第 2 に、申請機関については博士・修士・学士のいずれかの課程に位置づけ審査する必要がある。アクセディテーション基準には 10 数項目の指標があり、その指標の充足状況により申請機関が以上のいずれかに該当するかどうか判断されるようになっている。指標の内容については別に紹介したことがあるので省略する (「大学教育改革における大学・地域パートナーシップの開発過程に関する国際比較研究」北海道大学生涯学習計画研究部, 2006・3)。ただしこの基準は私立大学には適用されない。アクセディテーション基準は、後に施設アクセディテーションとカリキュラム・アクセディテーションに分けられ、前者の認証が先行し、後者については 2000 年前後から実施されることになった。

(3) 90 年代はじめの大学経営・管理

1990 年改革による大きな変化は、大学の経営・管理の責任が科学教育省から大学に委譲され、大学の自治が認められた、という点である。大学管理の責任者は学長 (Rector) である。学長は通常学内の選出機関が作られ、そこから推薦されたものが教育大臣により任命される。学長

の下には3人の副学長(教務, 財務, 研究担当)のほか, 3つの諮問機関が設置された。学長審議会(Rector's Council), 研究者審議会(Learned Council), 大学審議会(University Council)である。学長審議会は学部長, 研究所長, 副学長で構成され, 月2-3回開催する。各種の手続き上の重要事項について学長を補佐する。研究者会議は上級研究者の代表で構成され, 学問・研究上の重要問題について年2-3回開催され, 学長に助言を与える。大学審議会は教員・学生・職員・各種管理職の代表で構成され, 年2回開かれ, 大学生生活の質の問題について学長に助言する。

こうした学内組織のほかに, 全国的な二つの高等教育審議機関がある。高等教育改革委員会(Higher Education Reform Commission, HERC)と全国学長会議(Council of Rectors)である。HERCは, 1990年に人民大会議(国会)に付置され, 議長は国会議員の中から選出され, 国会の教育科学文化常設委員会に審議結果を報告する。メンバーは教育省の教育・科学局長, 科学アカデミー副総裁, モンゴル国立大学・科学技術大学・通商カレッジ・経済カレッジの学長, 医科大学副学長, 国立教育開発研究所副所長, その他科学アカデミーや国会議員からの追加メンバー2人などで構成される。審議事項は高等教育改革に関する重要事項である。

HERCの下に高等教育改善基金(Foundation for the Improvement of Higher Education)が設置され, 基金作り, 私企業との連絡, 国際協力などの分野でHERCをサポートする。国会議員, 学長関係者, 科学教育省関係者, 科学アカデミー関係者, フランス大使, 副首相, 私立大学学長などで構成される。

学長会議(Council of Rectors)は科学教育省に付置され, 国立大学学長, 私立高等教育大学協会会長, 教育省中等後教育局長などで構成される。モンゴル国立大学学長が議長で, 国立私立大学に関連する省規則や管理運営上の問題について大臣に助言を与える。

こうした審議機関は非政府機関であり, 決定権限を持たない。その審議結果が科学教育省や国会でどれだけ尊重されるかもわからないし, 審議事項やメンバーに重複も多い。しかし1990年直後の改革当初においてこうした機関が出来たことは, 高等教育改革がいかに急務であったかを示している。

(4) 90年代はじめの学生の授業料・定員その他の大学問題

1990年以前において大学生数が最高だったのは1983年の25,979人であった。1989年以降の学生数の推移を1994年までで見ると, 19,504人(1989年), 17,338人(1990年), 16,801人(1991年), 19,827人(1992年), 24,247人(1993年), 27,870人(1994年)となり, 1991年までは急減するが, それ以降は増加し, 1994年には旧制度下での最高数を越えた。2000年には77,281人を数え, 1983年の2.97倍となる。こうした傾向はほかの学校には見られないことで, いかに高等教育への志望者が急増したかわかる。これを大学・カレッジなど高等教育機関数で見ると, 1990年以前は国立機関だけの8校であったが, 1992年39校, 95年65校, 1997年86校, 1999年118校, 2001年178校と急増する。このうち国立大学は40校くらいだから, いかに私立大学が増えたかわかる。

90年以降の大学での大きな変化は, 1993年からはじまる授業料の徴収であった。90年以前は授業料無償のほか, 学生すべてに奨学金が支給されていた。また定員枠で遊牧民や労働者の子弟は知識人の子弟に比べ優遇され, 県(アイマグ)にも各国立大学の学生定員が配分され, 都市・農村の格差はなく, 平等原理が働いていた。しかし93年以降授業料の徴収が始まり,

この原則は崩れる。さらに 90 年以前大学の経費は全額国が負担していたが、これが崩れ、光熱水費以外は授業料収入に依存せざるをえなくなり、大学の財政基盤は危機に陥る。大学は一時期、授業料や学生定員の枠を自主的に決め、特にウランバートル出身で授業料の負担能力のある学生定員を自らの裁量で増やし、危機を乗り越えようとした。しかしこれは市民の反対運動にあい、また学生定員については教育省の所管となり、この点では大学自治は実質をとまわらないまま経過した。

そのほかこの時期の大学改革の問題点を紹介する。

- ①大学教員の質の問題である。大学教員の多くは 90 年以前からの教員で、そのほとんどはソビエト時代に養成されていて、新しい市場経済社会のための訓練を受けていない。そのため新時代に対応できる学生を育てる力量に乏しく、高等教育の質は急速に落ちている、という批判が一般的だ。教員の再訓練と養成が緊急課題になった。
- ②教員数がその他職員に比べ少ないという問題である。これも社会主義時代から継続している問題だ。1991 年度で見ると、モンゴル国立大は教員の比率が 37・0%，教育大が 42・7%，科学技術大が 50・5%，農業大が 41・9%，医科大が 54・6% といった状況で、教員数が大学職員全体の半数以下であり、教員の比率を上げないと大学の質の向上を図れない状況であった。しかし急騰するインフレの進む中で歳首はできなかつたし、また新たな教員の供給はその養成が機能せず不可能に近かつた。
- ③大学生の中の男女差が大きすぎるという問題であった。女性の比率が圧倒的に高く、3分の2が女性で男性は3分の1に過ぎない。この傾向はすでに中等教育段階から明らかで、大学においては一層はっきりした。90年以降の経済の悪化と食料危機の中で男性は遊牧業に回されたことが原因であるが、その結果女性のほうが社会的地位につく機会は増え、男性の就職機会は著しく減った。このことが遊牧文明に与えた影響は大きく、男性の地位の不安定化をきたし、また家族構成やその機能に深刻な影響を与えた。
- ④92年以降の私学の急増は、小規模私立大学の乱立状況を生み出した。私学の設置が投資の対象になる傾向もあり、質の低い大学も多く出た。学科は会計、ビジネス、銀行、経営、語学、など市場経済社会への移行に関するものが多く、自然科学系はほとんどない状況だった。大学間の授業科目の重複が多く、図書館、学生寮など共同に使用できる施設もあるが、大学間の共同利用の動きは進んでいない。
- ⑤国立大学についても、すでに述べたように1990年時点でモンゴル国立大学は分解状況を見せ、農学・医学・教育・工学系など実生活や産業に関連する学部が分離独立し、新大学をつくった。その結果モンゴルには総合大学なるものがなくなってしまった。モンゴル国立大学は基礎研究を主たる課題とするようになり、実世界との結合が弱く、このことが基礎研究の質の向上にも悪い影響をもたらした。
- ⑥研究と教育の統合が叫ばれたにもかかわらず、90年以降さしたる進展を見せなかつた。一部例外を除いて、科学アカデミーはそのまま残り、大学との統合は実現しなかつた。その結果、今に至るまで大学は教育機関であって研究機関ではないとする観念が尾を引いている。
- ⑦高等教育や研究についての情報収集や政策分析が弱く、各機関の年次報告が作られない。こうしたことが政策形成力を弱めている。

(5) 「モンゴル人材開発教育改革プロジェクト・マスタープラン」(1994 - 98) と大学

このマスタープランは1994年から5年間の教育改革プログラムを個別サブセクターごとに科学教育省が中心となって作り、国会が承認したものである。ここではその中の高等教育の分野について強調している点を紹介する。

① 第1に指摘している点は、大学の細分化状況である。すでに見たようにモンゴル国立大から工科・医科・農科・教育などが独立し、その総合性は崩れた。M・Pは次のように言う。「モンゴル国立大は分解し、その有害性が証明されているように個々ばらばらになってしまった」、「MSUの分裂から生まれた大学、カレッジ、研究所、センターなどすべてをサポートするにはモンゴルはあまりに小さいし、経済基盤はあまりに弱い」、「統合が必要である。大学はいまいろいろな学部にある教授と研究を統合しないといけないし、同時に科学と技術の活動を統合しないといけない」、「適切な多様化と統合とが必要であり、それは大学の責任の普遍的なエリアの中で各施設が自らの役割と使命を明らかにしたときに最善の達成を見せる」、「効率的な高等教育システムを創造するためには、合理化のプロセスが出来るだけ速やかにとられないといけない」。

② こうした背景のもとに、マスタープランは、「高等教育合理化委員会 (Committee on the Rationalization of Higher Education)」の設置を勧告する。これは首相指名の機関で、教育省と他の省庁、学長カウンスル、国会議員、国会の教育関係常任委員会、高等教育改革委員会 (HERC)、私学代表、商工会議所、大学教員・学生代表などで構成される。その任務は、①中等後教育機関の教育課程、研究活動、計画の効果、大学の使命、高等教育機関の類型化の現状(3つの類型)、学生数などについて正確なレビューを実施する、②高等教育機関の統合の最適形態を勧告し、研究機関の統合および大学への編入のガイドラインを作成し、個別学部ごとに期待される教授・研究・公共サービスの内容について提示する、③単一の国立総合大学の創設について勧告書を作成する、④国立高等教育機関の民営化にむけて検討を開始する、などであった。90年に新制大学が出来、まだ3年前後しか経っていないこの時期にこうした制度改革が提起されたのだった。特にモンゴル国立大学の「分裂」の影響と効果は大きかっただけに、こうした動きにはどのような動因がはたらいたのかについての検討が必要だ。

③ 高等教育機関の自治の拡大

1991年の教育法で多くの権限が大学に移され、私学設置の自由を含めて大学の自治は拡大した。しかし、制度的な自治の拡大とその実際とは異なる。特に大学経費の国庫負担がなくなり、授業料の徴収がはじまっても、学生の入学許可をめぐる、入学定員、奨学金などがかかわって、大学の判断余地は少なく、国の統制が依然として強かった。M・Pはこの点がかかわって(1)学長カウンスルが大学ごとの入学者の予測と目標を決めることができなければならない、(2)政府の学生融資プログラムを、従来の規格化された画一的授業料補助制度から、学生が自ら得た融資を自分で選んだ大学に持っていけるように学生中心の融資に変える必要がある、という2点を強調した。M・Pはこうして当時大きな社会問題になっていた授業料、入学定員、奨学金の授与問題を含め、大学が自治の機能を発揮できていない現行制度を批判した。これは教育省批判を意味した。

④ 大学の効率性の向上

この点がかかわって、特に教授団の老齢化の問題を取り上げている。「この国の上級教授団は学問分野であまりにも専門分化しており、また教える学生数も少ない。こうした過度の専門分化以上に深刻な問題は老齢化の問題だ。多くの教員はその分野について最新のレベルを維持

できていない。彼らは教授や研究のアプローチにおいて科学的方法よりもイデオロギーに依存しすぎる。また現行の改革に遅れをとっている。特に市場経済への移行が必要としている分野で、優秀な教員を確保できないでいる。この分野での給与を上げる必要がある。」

以上の状況を克服すべくM・Pは大学内に改革のためのプロジェクトチーム（Special Task Force）の設置を勧告した。優秀で生産的で創造的な教員の評価制度や報奨制度の導入を提唱した。モンゴルの大学が国際水準から大幅に遅れている現状を批判し、遅れを回復するための教員・研究者の留学制度を提唱した。大学・カレッジのアクレディテーションについても教育省サイドからではない非政府組織による評価機関を5年以内に設置することを要求し、かつ学内での自己評価、ピアレビューの導入を勧告した。

⑤ M・Pの勧告の最後は、起業家養成コースの設置を教育省や大学に要請している点である。90年以降市場経済への移行に伴い中小企業の育成が焦眉の課題になっていた。中小企業推進センターが設置され、91年より800人以上の起業家がセンター主催の研修を受け、300人が小企業を起こしている。M・Pはこのセンターおよび中小企業家と職業技術教育との連携を特に重視し、その連携機関として「中小ビジネスの開発と資源管理センター」の設置を勧告している。これはビジネス世界と中等後教育機関との間に協力関係がないことに注目し、商工会議所の援助の下、大学・カレッジの専門家が起業家対象の研修コースを開き、学士課程に起業家養成コースを設けることを提案している。

(6) 「モンゴル教育セクター戦略 2000 - 2005」と大学（2000・2）

21世紀の教育について基本戦略を定めたこの政府文書で高等教育政策がどうなっているか、また1990年代の経過と2000年時点での現状をどう見ているか、について触れる。

94年のマスタープラン以降、1998年教育法の改正やいくつかの政府文書の中で高等教育改革の課題が提示されてきたことは事実であるが、それがどの程度実現されたかは別の問題だとこの戦略文書は言う。「法的な基礎付けは確立されてきているが、実際の実施は遅れており、うわべだけであり、教育のなかみや供給の方法にまで深く入り込んだ政策が実現されなければならない。修士や博士課程の基準はまだ開発されていない。結論的に言えば、なかが信頼性を欠いているし、高等教育機関ごとに一貫性がない。高等教育の教員養成、現職研修、継続的専門開発などの組織ができていない。高等教育のアクレディテーションはスタートし、広がりつつあるところだ。高等教育改革の評価やモニタリングはちょうど始まったばかりだ。」

このような要約が1990年代終わりの時点での高等教育改革の状況である。この戦略文書はこうした現状把握の下、次のような課題を提起する。それは、①高等教育の管理と財政の改善、②質と効率性を改善するための高等教育改革の強化、③より効果的な政策形成、の3領域である。

①高等教育の管理と財政の改善

- ・高等教育機関が財政的に自立し、持続的な開発が可能になる条件を創造し、基準を満たした国立高等教育機関についてはその管理を民営化する。
- ・高等教育の管理能力を開発するために必要な組織を創設する。
- ・高等教育の計画、資金管理、会計について適切なシステムを開発する。
- ・大学の収入創出活動を助長する法的、財政的環境を創設する。

②質と効率性を改善するための高等教育改革の強化

- ・修士・博士課程の教育基準を開発し、その実現を促進する。

- ・特定の専門領域について教育課程に関するアクレディテーションを開始する。
- ・高等教育のモニタリングと評価活動を向上する。
- ・高等教育の教育・研究・図書館ネットワークを強化する。
- ・教員の研究活動を向上させる。
- ・大学における訓練・研究・ビジネス活動を統合できる適切な組織を開発し、統合する条件を創り出す。
- ・大学間で共通資源を共同利用できる体制作りを援助する。
- ・教員の社会・経済的処遇を改善するシステムを開発し実現する。

③より効果的な政策形成

- ・高等教育の発展、国立私立大学の政府援助、大学の自立的な経済・ビジネス活動を支援する法的財政的基盤を創設する。
- ・知的投資や人的資源の開発を管理し計画できるシステムを改善する。

2 モンゴル国立大学関係者の証言

モンゴル国立大学は1942年に創設され、その歴史はモンゴルでもっとも古い。1990年以前は唯一の総合大学であり、61年にできた科学アカデミーに研究機能が移されたとはいえ、なお教育と研究の統一に努力した。こうした歴史もあって、ほかの大学とは異なる役割を果たしてきた。たとえば自然・社会・人文の科学領域で、大学・カレッジ・中等後教育機関、研究所などの教師を養成してきたし、基礎技術の開発分野では各科学領域の統一を図る専門家を養成してきた。またモンゴルの伝統文化や「モンゴル学」を研究・教育する研究センターとして機能した。最近の専門分化の中、こうしたモンゴル国立大学特有の伝統に自覚的な教員は少数になってきたが、それでもそうした教員は現在でもまだ見られるし、ここに紹介する教師もそういった人たちだ。

改革がはじまった1993年時点でいうと、モンゴル国立大学は、5つの学部 (faculty, 数学, 物理, 自然科学, 社会科学, 法律) と、4つのInstitute (モンゴル学, 生物学, 経済学, 外国研究) をもち、53の学科 (departments) が付置されている。各学科には講座がある。学生の教育課程はこの時点では5年制である。1992年にはホブトの教育Institute (4年制の教員養成学士コース) とザブハンの経済カレッジ(専門中等学校)が国立大学の分校になった。これは工学・医学・農学・教育の4学部が分離独立し、総合大学としての機能が削減されたことに対する対抗策でもあったが、いまに至るまで総合大学を回復するには至っていない。これとは別にモンゴル国立大学は優秀生徒のための付属中等学校を持ち、国立大学に入る優等生を全国から引き寄せている。

以下に紹介する国立大学の6人の教員は、私が教育行政アドバイザーとしてモンゴル国立大に理科実験開発研究センターを設置したときに一緒に共同した人たちである。前回紹介したドヨド、ブルマーさんたちと一緒にあって90年以前から数学や自然科学の教授法を独自に研究し、新しい教育学の基礎を築いてきたグループである。それと同時に、彼らは90年の民主化には積極的に参加した人たちである。モンゴルの民主化はモンゴル国立大学の関係者、それも数学・物理・化学などの教員が中心になって推進してきたのであり、ここに紹介する人たちもそのグループの中心にいた。改革へのかかわりはそれぞれ異なるが、改革の情熱では心を共にする人たちであった。

ドルジさんは、89年大学改革が始まり、学長を選挙で選出する制度がはじめてできたときに学長に選ばれた人である。新しい大学の創設時の努力や課題が述べられている。第2期の学長選挙でも学内では第1位で推薦されたが、教育省からは別の人が任命され、学長職を降りた。その後は本来の化学の世界にもどり、現在は化学学部の学部長をしている。モンゴルの学会・教育界を支える中心人物のひとりだ。

ダワーさんは、ドルジさんとほとんど一体になって90年以降一貫してモンゴル大学の改革を推進してきた人で、主として教務関係からこのプロセスを指導してきた。現在は教務担当副学長で、大学院の改革や総合大学化に向けて努力している。ソビエトで核物理を専攻し、帰国後直ちに大学の執行部に属したので、本来の研究・教育に復することを強く希望している。

バトフーさんはドルジさんと同じ化学の出身で、薬学を専攻している。この後に紹介するダルジャーさんが90年後はじめて東北大学の大学院に留学して博士号を取得するが、その直後にバトフーさんも東北大の大学院に来て、博士号を取得した。モンゴルの薬草を研究対象にしており、国際的な研究ネットワークが広い。北大薬学部とも交流している。彼は別に自分の出身地であるオブス県と日本との教育友好協会を作り、オブスの教育、それも遊牧文化を継承する教育の再興に努めている。遊牧文明をどう継承するかはモンゴルの教育改革にとって最重要課題であり、この点でもバトフーさんの仕事は注目できる。

ダルジャーさんはこの後に紹介するオユンツェツェグさんと一緒に化学研究室を支えてきた中心人物で、89年から始まった民主化の動きにいち早く参加した。93年からは6年間東北大学研究科に留学した。モンゴル国立大から日本の大学院に留学した最初の一人だ。金などモンゴルにある希少金属の精錬化学を専攻しており、その貢献は大きいですが、精錬による環境汚染など研究課題は拡大している。モンゴルにおける民主化の改革はいまだに実現されていない、第2のベレストロイカが必要だ、と彼女は言う。

オユンツェツェグさんは国立大の化学教室の中で、化学教育を専攻し、大学における教育だけでなく、初等中等教育の改革に一貫して努めてきた。教育現場にいる彼女の教え子が大学院に在籍しており、彼らと一緒に新しい理科実験教材の開発にかかわっている。モンゴルの学校現場ではいまだに理科実験など出来ないでいるが、そのためにも新しい教材や授業法の開発が彼女には求められている。彼女のヒアリングからはモンゴルの民主化に寄せる彼女の情熱が伝わってくる。

アマルザヤさんは数学の専攻で前回紹介したドヨド教授の弟子である。東京都立大で博士号をとっている若手の研究者だ。モンゴル大統領から1年に一人だけに贈られる優れた若手研究者の表彰制度があるが、3年前彼はこれを受賞した。今回紹介する彼のヒアリング内容はほかの人とは違う。90年前後のモンゴルの民主化を支えてきたパッションがそのまま彼には残されている。90年以前のモンゴル人民革命党に対する批判は鮮烈でさえある。彼はきわめて物静かな研究者であり、優れた教育者であるが、うちに秘められた情熱の強さに私は感銘を深めた。日本の大学で博士号を取得し、モンゴルに帰国した若手の研究者で構成する「博士会」という組織があるが、彼はその中心的なメンバーで、このグループはモンゴルの大学改革に貢献している。ダルジャー、バトフーさんもこのメンバーである。

(モンゴル国立大学については「大学教育改革における大学・地域パートナーシップの開発過程に関する国際比較」(北海道大学生涯学習研究部, pp. 183-187, 2006・3)の中の小出論文も参照)

16 ドルジ (D. DORJ 元モンゴル国立大学学長, 現在国立大学化学部学部長およびモンゴル教員協会事務局長)

私は1945年ザブハン県バヤンウルソムに生まれた。トヴァ族の多いところだった。父母は遊牧民だった。52年にソムの4年制学校に入学し、寄宿舎に入った。56-62年にヌムルグソムの10年制学校に移った。当時県には10年制学校はこことアイマグセンターにしかなかった。ヌムルグソムの学校は有名で、数学教師が特に優秀だった。

62年に高校を卒業し、国立大の地質学に入った。63年にレニングラード大に編入学し、無機化学、地質学を専攻し、モリブテンや銅などの鉱物資源の研究に従事した。68年にモンゴルに戻り、国立大の教員になった。75年にはポーランドのバルト海沿岸のグダニスクの大学院に入り、モリブテン、銅の研究を続けた。78年に帰国し、国立大に復帰した。

モンゴル国立大に戻ってからは、80年から教務部長をやり大学全体のカリキュラム作りに関わった。85年から89年まで教務担当副学長になった。ついで89年には学長選考が大学教員の選挙によることとなり、私が民主的手続きで選ばれた。ゴンチグドルジやジャグダルスレンなど他に5人ほど立候補した。学長は選挙制になったが、副学長などは従来と同じで大臣委員会の審査を受け、さらに革命党のナショナル委員会を通らないといけなかった。この委員会では国会議事堂の中にあった。このプロセスを通過するのは大変だったが、私は副学長にトムルオチル(証言2参照)を、全学教務部長にダワー(証言17参照)を指名した。

学長になりすぐ民主運動が始まった。新しい政党の創設には国立大学の教員が多く関わった。ゾリグ(哲学)やエンヘトブシン(法律)は民主党、ゴンチグドルジ(小国会議長、その後国会議長)やアルタンホセグ(財務大臣)は社会民主党の創設者だった。革命党の人は大学にやってきて「静かにやってくれ」と言うだけで反対はしなかった。運動は平和的に進んだ。

このときから大学の教育内容を変えなくてはならなくなった。理数科は変えなくても良かったが、社会・人文系は変えないとならなかった。各国のものを参考にした。アメリカや日本も参考にした。アメリカからはピッツバーグ大のスポウルディングが協力してくれ、大学の人材開発プログラムの実施をピッツバーグ大で引き受けてくれた。日本では東大や東京工大にいたり、専修大の広野教授(経済学)にも会った。私は92年に日本に行き、世界大学協会のシンポで神戸を訪れ、北海道では森本(北海学園大)、東京で鈴木や専修大、創価大(池田)を訪ねた。東京外語大にも行きモンゴル語学科との交流を深め、東大にはモンゴル語講座を作るのに関係した。日本の大学からは、学士、修士、博士の課程や学部4年間のカリキュラムなどを参考にした。この後モンゴルの大学カリキュラムを一般教育、専門基礎、専門教育により構成した。一般教育では今までの社会主義哲学、ソ連共産党史、モンゴル人民革命党史などの科目を削除した。

経済学ではヨーロッパのTACISやTEMPUSのサポートを受け、マンチェスター大学などを訪れた。こうした外国への教員派遣には日本政府の援助があり助かった。モンゴル大統領の経済顧問だったバトハチョシロンや今の日本センターの副センター長もこの頃ヨーロッパに行った。逆にヨーロッパからモンゴルに来た経済学者は少なかった。日本からは広野をはじめ何人か来てくれた。オーストラリアからも来た。法律や政治の分野ではドイツの援助があった。「ハンス財団」の援助を得た。この辺は法科大学長のナランゲレル学長に聞くといひ。

人文系は主に言語教育の改革で、英語、フランス語などを導入した。外国文化は従来社会主義国だけを対象にしたので新たな外国文化の導入では苦勞した。今までは革命党の言う事に従っていればよかった。それが全く新しい考え方で導入を図らなければならず、大変だった。日

本語科も立ち上げた。今までは選択科目で対応していただけだった。モンゴル学では日本はドイツのボン大学に次いで世界第2位のレベルにあった。ボン大学のハイシッヒを私は知っている。従来モンゴル文学というと革命党を賛美するもので本物ではなかった。90年過ぎに“モンゴル化”ということが叫ばれるようになり、新たにモンゴル言語文化学部を作った。ボン大学や日本の大学、チェコ、アメリカなどとも交流した。

90年過ぎのロシアの引き上げはそれほど影響を受けなかった。70年代までいたロシアからの教員は80年代には少なくなり、モンゴル人の人材養成ができていた。研究費などがストップされ、こたえたが、ロシアとの交流は少なくなった。むしろユネスコの援助が中心になった。ドイツとは70年ごろよりフンボルト大学との連携が進んだ。研究論文もそこで発表できた。モンゴルで優れた人が東ドイツにいった。2万人くらい行った。

学長として苦勞した事は、第1にはすでに述べたように教育内容を変えることだった。第2は、物的環境を整える事だ。自然科学が特に遅れていた。しかしこれはできなかった。第3は国立大学がばらばらになってしまったことだ。それまではエンジニアリング、農業、医学系の分野は国立大にあったが、これらが科学技術大学、農牧業大学、医科大学としてモンゴル国立大から独立してしまい、研究分野がばらばらになってしまった。特にモンゴルの研究分野が離れてしまい、基礎研究分野に国立大は偏ってしまった。Classic Universityは研究分野がコンプレックスでないと駄目で、研究が研究にならない。基礎研究だけでは現実世界から遠のいてしまう。かろうじて地質学や考古学、人類学の分野でモンゴルの学問分野が残されたが、国立大はプラクティカルではなくなり、理論に偏重し、有用性を欠き、特徴を出す事がむずかしくなった。他の大学との研究交流をできるようになるといいが、まだむずかしかった。第4は大学院の充実だが、一応学士、修士、博士の課程をつくったが、物的条件はできなかった。90年までは大学ではバチェラーのみの養成をし、全く特殊なモンゴルのものを除いては大学院の課程はなく、ソ連など他の国に依存した。新たに大学院を創設しないといけなくなったが、物的、人的条件はなかった。何とか修士課程には対応したが、博士課程はだめだった。教育省は教育改革をしてきたというけれど、それほどではない。物的には全く問題だ。教育省は授業料で運営できていると思うが、できるわけがない。

第5としては大学の組織運営の問題がある。私が学長になった時初めて選挙で選ばれた。ゴンチグドルジ、ジャグダルスレン、植物のダワーさんなど5人くらいが推薦され、選挙結果にしたがって私が任命された。96年選挙ではやはり5人くらいが各学部などから推薦されてきて、選挙では私が1位だった。しかし教育大臣はガンツォックを学長に指名した。

89年選挙のときは革命党の党員でないと駄目だった。私は80年代教務部長をしている時は党員ではなかった。党員になるのはいやだった。革命党史も好きでなかった。しかし86年に党員になった。当時はそういう状況だった。科学技術大学のバタルジ学長（いまはユネスコ勤務でモスクワにいる）の前の学長のアブダイは高等教育分野で改革に当たっていたから、彼に聞くといろいろ分かると思う。

モンゴル国立大学史では大学図書館に勤めていたジャムツが書いた本がある。「モンゴル国立大学の歩んだ道」とかいう本だ。たとえば56年頃学生が刑務所に入れられた事があった。私は大学4年だった。革命党がモンゴルの家畜を200ミリオン頭にしろ、といった。学生はこれは桁が違うと言って反対した。それで刑務所に入れられた。知識人は多く刑務所にいれられた。刑務所だけでなく、バヤンホンゴルその他遠方に知識人を送り込む遊牧地や木工所があっ

た。ナムセライ・ソドム元学長が書いた「私のモンゴル国立大学」という本もある。参考になると思う。

17 ダワー (Surengiin DAVAA モンゴル国立大学教務担当副学長)

私は1953年ゴビアルタイ県の中央部に近いシャルガソムに生まれた。遊牧民の子で、姉2人、兄1人がいた。姉は学校に行かなかった。兄も小学校4年を出ただけだった。遊牧民になる場合は学校に行かなくてもよかった。父はネグデルの一人だった。当時ハンガイ地方は50頭まで、ゴビ地方は75頭まで家畜を私有できたが、私のところはゴビ地方だったが、75頭まではいなかった。私は61年にソムの4年制学校に入学し、アイماغセンターで6年勉強した。いずれも寄宿舎に入った。数学が好きだった。

71年に高校を卒業し、モンゴル国立大学の物理に入り、76年に卒業した。卒業後2年間国立大で教員になったが、78年ソ連の原子力科学研究所(Joint Institute for Nuclear Research)に移った。これは1956年に社会主義国が共同して作った研究所で、公開施設ではなかった。これは今もあり、モンゴルからは5-6人行っている。これは途上国の科学技術を引き上げる役割を果たし、モンゴルも少ない分担金で参加することができた。サイクロトロン(当時660MEBのエネルギー)も備えていた。人工的に新物質を創造し、人材開発にも貢献した。モンゴルからはじめて100人以上が参加し、その半分はドクターを取得した。たとえばモンゴル国立大の7人の学長のうち2人はここで博士号をとった(ソドノム、ガンツォグ)。科学アカデミー総裁5人の内3人がここへいった。現在の総裁チャダラもそうだ。私のテーマは原子核の構造だった。

1986年帰国し、すぐに物理・数学学部の副学部長にさせられ、87-88年には大学院担当の全学教務部長に指名された。市場経済への移行とかかわって大学院を設立しはじめた最初だった。今まで博士号は外国で取得していた。ただモンゴル独自の特殊テーマだけ研究は国立大でやった。89年中ごろの選挙でドルジ学長が生まれ、副学長が3人指名された。第1副学長が教務担当、第2が研究外国語担当、第3が財務担当だった。教務担当副学長の下に教務部長がいて私になり、第1副学長はトムルオチル(証言2)がなった。それまではドルジが副学長、トムルオチルが教務部長だった。当時は革命党が強く、トムルオチルも私も革命党の面接を受けて指名された。92年にトムルオチルが教育省に移ったので、その後を受けて私が副学長に指名された。

96年にはドルジ学長の任期が切れて選挙が行われた。選挙ではドルジさんが勝ったが、教育大臣は新しい人を学長にしたいと言って、ガンツォグを新学長に指名した。法律では大学の教員の意見を聞き大臣が任命するとなっており、この手続きは必ずしも違法ではないが、大学教員の意向は入れられなかった。ドルジさんもガンツォクさんも党員ではない。90年以降学長は党員でなくてもよいように規則を変えた。政治上の問題を大学に入れないようにした。また学長はサイエンスドクターか教授であることを条件にした。この規則も90年以降に作った。学外者の影響を大学に入れなかったためだった。学長は立候補制ではなく、各学部から推薦者を出し、次第に絞っていく方式とした。また3期連続まではいいが4期連続はだめにした。学長第1期目は状況を知るのに時間を必要とし、実際は第2期日から本格的な学長の仕事ができるという事情を考慮したからだった。

18 バトフー (Javzan BATKHUU モンゴル国立大助教授、薬草化学、オブス・日本友好協

会長、日本モンゴル教育交流協会モンゴル支部長)

私は1961年6月、オブス県マルチン・ソムに生まれた。遊牧民の子だ。正確な誕生日はわからない。マルチン・ソムはかつて日本の新聞社のヘリコプターがゾドの調査をしていて墜落したところだ。ここは厳しい環境の地で、北にはウブス湖が、南にはヒャルガス湖があり、冬になると北風が吹くとウブス湖から、南風が吹くと南から雪が運ばれてきた。モンゴルで一番の積雪地帯で、深刻なゾドによく見舞われる土地だ。

1970年9歳の時に小学校に入った。8歳の時父が死んで、ネグデルの家畜の面倒を私も見なくてはならず、入学が1年遅れた。男4人、女3人の兄弟だった。母が育ててくれた。私は下から2番目だった。父は革命党の積極的な党员で、プロパガンダの資格を持ち、新聞を配達していた。ある日ウランバートルに出て、そこで急病になり、亡くなった。おそらく腸の病気だった。7人の子供を母が育てた。ネグデルからは家畜の収入があり、子供には手当てが出たし、学校は大学まで無償だったから、私は大学まで行けた。社会主義時代は労働者・農民の子を政府がバックアップする制度だった。いまは国会議員や金持ち・有力者をバックアップする制度になってしまった。教育制度の基本が逆転してしまった。

9歳でソムの8年制学校に入った。高校はアイマグセンターのウランゴムの学校だった。この高校には県内いろんなところから生徒が来ていた。ただハルハ族は二人しかいなかった。ほかは西部のバヤド、ドゥルベド、ホトンなど諸部族の出身だった。アイマグには18ソムあったが、うち3ソムだけがハルハだった。その他の諸部族は国全体では3-5%に過ぎないが西部では多かった。むしろハルハの方が少数でいじめられたりした。

私が行った学校はよかった。私はすべて寄宿舎にいた。全部自分でやらなければならなかった。ほとんど遊牧民の中で育てられた。知っている人のネットワークは広がった。私は社会人として育てられた。物理や化学・数学が好きだった。実験や実習もあった。この学校はソ連の援助で建てられた。1972年ブレジネフが10校高校を寄付した。その一つがこの高校だった。実験室もそろっていた。

1980年ウランバートルに出た。モンゴル国立大の自然科学部化学科に入った。ちょうどダルジャーさん(証言20)が大学を卒業し化学科の先生になった年だった。自然科学部には化学のほか生物・地学の学科があった。物理・数学は数学物理学部を作っていた。化学科は1学年50人だった。これが2クラスに分かれた。一つのアイマグから2人くらいしか入らなかった。各県ごとに大学入学定員はきまっており、大学入試の成績順に上から志望大学学科を選ぶことができた。おそらくウランバートルに割り当てられた定員は10人以内だったと思う。こうして地方からも平等に大学に入ることができた。

85年に大学を卒業した。ホプト大学に就職した。これは79年にできた独立校だった。ジャダンバがまだ学長をしていた(証言11)。後に教育大の分校になった。そこで3年間生化学と化学を教えた。88年にドクター入試に合格し、ロムノソ大学(モスクワ大学)に半年留学した。これは研修のようなものだった。ドクター入試の科目は、ソ連共産党史、モンゴル革命党史、マルクスレーニン主義哲学、ロシア語、専門科目だった。ソ連共産党第25大会決議、モンゴル革命党18回大会決議などを読んだ。ロシア語はブラウダの翻訳だった。モスクワ大への派遣は革命党の方針で決まった。党员でなくてもいけた。党员には学生は簡単にはなれなかった。化学の50人のクラスでは一人しかいなかった。革命青年委員会(コムソモール)には全員が入った。バーフチョウ→ピオニール→コムソモール→党という順序だった。党に入ることは今

では国会議員になるようなものだった。全国で8万人くらいいたのだろうか。成人20人に一人くらいかと思う。

88年のロムノソフ大学では研究環境は整備されていて実験もできた。政治の影響などはなかった。しかし街頭では当時モスクワ市長だったエリツインとゴルバチョフの対立は激しかった。私はそうした動きには関係をもたなかった。ペレストロイカの直前だった。

89年帰国後科学アカデミーの科学研究所にあった博士課程に入った。そこで3年間学生生活を送った。92年に修了しモンゴル国立大学の化学科の講師になった。95年に国立大を休職し日本に渡った。仙台にあった日本語専門学校に2年間入った。ウブス出身のガントゥムルという友人の勧誘だった。彼は今モンゴルの国会議員だ。彼の下宿に入り込み日本語の勉強をして、97年に日本政府の国費留学生の試験を受けて東北大の博士課程に入った。ここで4年間研究生活を送った。テーマは植物(薬草)の抗炎症作用についてで、モンゴル、インドネシア、エジプトなどの薬草から活性成分を抽出し、構造を決定した。

1990年のモンゴルのペレストロイカには積極的に参加した。毎日集会に参加した。社会は必ず変わると思ったし、変わらないといけないと思った。これは私の父の影響だったと思う。より良い社会のために努力することを父から学んだ。しかし現在この期待は裏切られたままだ。社会はまだ変わっていない。今でも国会の前ではハンガースライカが実施されている。毎日人が集まってきている。私も参加し、お金など出している。学生にも参加を訴えたりする。

しかし今の学生は考える事をしない。私はいろいろな国へ行くが、どこでも学生は政府批判をしている。これに比べモンゴルの学生は批判勢力ではない。試験をやると30%は落ちる。大学を卒業し社会に出たら何をやろうとしているのかわからない。試験の点数だけを気にする。

今外国との共同研究は、日本では東北薬科大、日本薬科大、富山医科薬科大としている。オーストリアのグラーツ大とも始めた。内モンゴルやイルクーツクの大学ともしている。日本の東北大でやったような先端機器を使った研究はモンゴルではできない。薬物の構造決定などモンゴルでは無理だ。だから東北大での研究の延長ではない研究を開発している。機器は使わなくてもいい。お金を持っている研究者とは争わない。そうでなくても研究はできる。クラシクな方法でも研究テーマはまだ残っている。昨年より北大の薬学の小林教授とも共同研究を始めた。できたら北大とモンゴル国立大で環境問題で共同研究ができるといいと思っている。

私はモンゴルのウブス県と日本との友好協会を作り、ウブスに小学校を作って県に寄付した。北海道の砂川南高のOBが協力してくれている。先日もOBの看護婦さんが来てお金を寄付してくれた。私はこの学校を遊牧民の学校にしたい。遊牧文化を残さないといけない。ウランバートルの都市空間ではモンゴルの子供を育てることはできない。ウランバートルで言えば80年代のウランバートルの方がよかった。そのあと都市化が進んだとはいえ、80年代の人間の方がずっとよかった。

19 ダルジャー(TsembeI DARJAA モンゴル国立大化学科教授、理科実験指導法研究センター長)

私は1957年ウランバートルで生まれた。兄弟4人で上が姉二人、下が弟だった。父は1921年生まれで18歳までラマ僧だった。1939年に軍隊に入隊し、ハルハ川戦争(ノモンハン事件)に参加した。1945年にはロシア軍と一緒に内モンゴルに入った。7年間の軍役をやめ、ウランバートル市役所に入り行政指導部長などした。2005年に亡くなった。母は1926年生まれで

7年生学校を出て看護婦学校に入り、ずっと看護婦をしていた。家庭は比較的裕福だった。

8歳で小学校に入り、18歳で高校を出て、モンゴル国立大の化学科に入った。1980年に卒業し、81年に同じ大学で化学の教員になった。卒業して2年間は助手で、3年目から講義を担当した。10年間分析化学や地球化学の講義をした。研究はモリブテンからレニウムを抽出する技術を開発することだった。

89年から90年にかけてモンゴルでもペレストロイカが始まった。私はこれは必要だと考えていた。85年頃から集まりだし、87年頃強くなった。大学の社会科学系の教師やロシア、ポーランド、ドイツに留学して帰国した学生なんかを中心だった。私は86年に6ヶ月間ロシアのモスクワ大学に行ったが、まだペレストロイカははじまっていなかった。88年頃からロシア批判が強くなった。89年には同僚のオユンツェツェグさんなんかとスフバートル広場に出た。積極的参加というより何が行なわれているか、ハンストの人はどうしているか、といった関心からだった。化学系の人はほとんど皆参加した。しかし目的は明確ではなかった。どんな社会にしたいかがわからなかった。資本主義社会とは何か、民主主義とは何か、分かっていたわけではない。

90年当時の革命党の年輩の人は偉かったと思う。国民のことを考えたから権力から降りたのだと思う。交代した若い革命党員が偉かったとは思わない。若い世代の中心人物は国民のことをわかっていない。若い世代は年輩の人から何も学ばなかった。

90年以降になっても、大学はほとんど変化しなかった。私は93年4月に国費留学生として東北大に留学した。99年4月まで東北大で修士と博士課程を過ごしドクターを取った。帰国後研究室の人とは話が合わなくなった。特に年輩の人とは了解し会えなかった。たとえばこれが問題だといっても、そんなことはないという。90年以後化学科から外国へ出た人は私が最初だったが、その後20人くらいいる。彼らのうち帰ってきた人は2-3人で、後は外国に出たまま。学科にいるのは年輩の人と、若い人だけで、私がまん中にいる。年輩の人は新しいことをしようとしない。面倒だ、となる。そしてまだ残っている。60歳以上が私の研究室では12人中6人だ。一応60歳が定年だが、しかし辞めない。なぜならそれに代わる若い研究者が外国へ行ってしまい国内にはいないからだ。大学の研究条件が悪いので帰ってこない。悪循環になっている。

私は日本に留学してよかった。私にわからなかった社会を見ることができた。私はドイツに行きたかった。外国派遣のための教育省の試験を受けたら日本に行くことになった。教育省が決めたことだ。日本には私より以前に5人いた。私と同期は4人で、東北大には3人だったが、うち2人はその後秋田大に移った。これらは日本政府からお金が出ていた。モンゴルに戻って来いとは言われなかった。修士課程では東北大の指導教授からテーマを与えられたが、ドクターではモンゴル時代のテーマを継続できた。

帰国後、研究テーマの継続はできなかった。研究条件が違う。別のテーマに変えた。レニウムの抽出から金や銀の抽出に変えた。今日本との共同研究はしていない。私の指導教授は退職してしまった。大学での研究費は授業料収入のみで、これは学生の教育費にも満たない。外部からのプロジェクト経費を探してくるしかない。外国のプロジェクトを受けるのは大変で、国内企業から金や銀の安全抽出技術の開発といったテーマで研究費をもらう。しかしこれは教育実習費などには使えない。政府からの金は科学技術基金からくるが微々たる物だ。それらは大学以外の科学アカデミーの人的費用に化けてしまう。

私の二人の子供は日本で勉強できた。これが私の日本での宝だ。外国の文化を吸収できた。

息子は今モンゴル外務省に入り、モスクワ国際大学で勉強している。娘は大学2年で日本語と英語で国際経済を勉強している。

20 オユンツェツェグ (Nookoo OYUNTSETSEG 国立大学科学教育センター, 化学教育)

私は1957年バヤンウルギー県のアルタイソムに生まれた。県西部の中国国境に近いところだ。59年にソムとして独立した。60年代にはソムがいくつか独立してその数が増えた頃だ。県はカザフ族が主たる種族だが、他にトヴァ、トルゴート、ウリヤンハイ族などがいた。私はウリヤンハイ族だ。父はノーコといい、ソム副長で、木工や狩猟、模様造型に堪能だった。兄弟は13人いた。小学校には65年に入学した。4年制の学校で、3人の教員と校長がいた。1・3年生と2・4年生がそれぞれクラスをつくり、私の兄弟4人が一緒に1・3年クラスで勉強した。双子の兄と姉がいてこれが3年生、もう一人の兄と私が1年生だった。クラスはそれぞれ20人くらいだった。1年の兄は社会科が得意で、私は理数が得意だった。だから宿題をわけあって、得意の科目をやって共同した。その兄はモンゴル国立大の法学部を出て高等裁判所に勤めている。私は国立大の化学に進んだ。

私が小学校を卒業した年にソムに中学校ができた。しかしそれまでは中学がなく、8年義務制だったが中学に進むものは少なかったし、行かなくてもよかった。双子の兄と姉も小学校を出て遊牧民になった。しかも7学年を終えると強制的に遊牧民になった時代で、20人のクラスから5-6人しか8学年には進学しなかった。生徒の75%はカザフ族で、後はモンゴル人だった。第8学年まではカザフ語・モンゴル語別々のクラスに分かれていた。第9学年の高校になってモンゴル語の一緒のクラスになった。教師はいい先生だった。

1959年にネゲデルができて、遊牧民は集団化され、私の家は父が副長で公務員だったため10頭以上家畜をもってはいけなかった。遊牧民の場合は50頭くらいまで持つことができた。夏休みには私は祖父母の家に行って牧畜の手伝いをした。そして毎晩昔話を祖父母から聞いた。ゲセル・ハーンの英雄物語などは1ヶ月もかかった。ウリヤンハイ部族の物語も聞いた。この部族は狩猟で有名でジンギスハンの9人の弟子のうち2人はウリヤンハイだった。当時は今の内モンゴルに住んでいたが、そのご現在の西部地区に移動した。なおジンギスハンの話は当時は禁止されていて、祖父母から聞くことはできなかった。

当時の先生は今のように入学者の資格をもっていなかった。2年生の師範卒か普通学校の10年卒だった。しかし教育に熱心で、子供と仲が良かった。専門的な知識はすくなかったとしても、楽しい授業や子供と遊ぶ事を考えていた。教員の活動のうち40%は校外活動やピオニール、グループ活動、演劇などで、子供と良いコミュニケーションをもっていた。

私は8年を卒業しアイマグセンターの第2学校の高校に入った。クラスは50人くらいで、寄宿舎にはじめてに入った。理数科が好きで75年に卒業し、国立大学の化学に入った。当時は大学進学者が少なく、75年までは成績がいいものは強制的に大学に入れられた。私はその最後の年に大学に入ったので、試験はなかった。76年から大学入学試験が始まった。遊牧民の子供は先生か医者しか将来進む道を考えられなかった。私は化学のラピザ先生の授業が好きで、化学の教師になりたかったから、国立大の化学に入った。バヤンウルギーにはこの年化学への進学は3人に限られていた。モンゴル国立大と教育大それにロシアの農業化学の大学だった。私の主人はずっと同級生だったが詩が好きで、国立大のモンゴル語科に行きたかったが駄目で、軍人大学に入りいまその教師をしている。

75年に大学に入ったが、それまでに大学の教育改革が2回あった。1回目は65年で教育内容の改革、2回目は73・4年に計画され、75年から新しい内容で実施された。私はこの年に入った。当時は5年制で私は1年病気したので81年に卒業した。4年制になったのは90年以降だ。クラスは26人だった。ダルジャーも一緒だった(証言20)。当時の学生は皆奨学金をもらった。成績で差があったが、私は良かったので1ヶ月300Tgもらった。これは中等の公務員の月給と同じだった。普通の奨学金は240Tgだった。私の兄弟は13人で5人大学に入ったので、家に帰るときはお土産を買って帰った。

81年卒業してすぐ私は国立大の教員になった。有機化学の教授学担当だった。国立大の教員になるには5段階くらいの審査を受けなければならなかった。最後は革命党の党委員会の面接だった。これは学外でやられ、党員でなくても審査された。私も党員でなかったが審査を受けた。当時は遊牧民や労働者の子供は優遇された。知識人の子弟は国立大には就職できなかった。私の友人に大臣の子供がいたが、この人は国立大には就職できなかった。

80年代になり大学内でも社会主義か民主主義か、といった議論が起ころうになった。私は活発な学生で、革命教員委員会の会長をしていた。社会科学のほうの会長は1998年頃国会議員になって殺されたあのゾリグさんだった。党は神様のような存在で、党員になることは難しかった。2000年にはモンゴルは共産主義社会になると教えられた。しかし私はコムニズムをつくる事は無理だと思っていた。資本主義のいいこともなんとなく分かってきた。しかしコンピューターを大学に入れるのはロシアから禁じられていた。若者がこれによって世界の情勢を知る事は厳しく制限された。それが逆に不信感を生み出した。

大学の教員は70年代末から考え始めていた。ドヨド教授(証言8)の科学教育センターに81年頃より集まってきた数学・物理・化学の先生達は83年頃より定期的に会議を初め、今の教育を変えないといけないと言い出した。社会科学関係でもゾリグさん、ランバーさんを中心に会議など開いていた。学生も革命青年委員会の会議に毎週木曜午後に集まり始めた。中には、非公式のクラブをつくるものもいた。

こうした動きの中で次第に運動は「社会派」「教育派」に分かれた。ゾリグなど社会哲学や科学的社会主義を標榜していた人は「社会派」に、ドヨド(数学)、ジャグダル、ネルグイ(化学、証言4)など教育改革を重視していた人は「教育派」の中心をつくった。両方とも社会変革の必要性を認める点では同じだったが、「社会」を変えるのか、「教育」を変えるのか、の違いがあった。「教育派」には80年代の世界の教育改革の影響が見られた。ペレストロイカ以前は社会主義のイメージしか持てなかった。ペレストロイカ以後は以前の社会はなんだったのか分かってきた。

89年からデモがはじまった。国民全体が参加したわけではない。民主主義が大事だと叫ばれても、それに対する批判もあった。大学の教師は自分の足で歩み始めた。商売をする人は大学を出た。政治家志望者も大学を去った。研究や教育に残る人もいた。もちろん何も考えず今までどおり自分の意見もはっきりしないままの人もいる。モンゴル人は民主主義を理解していなかった。人口が少ない中で民主主義や市場経済をつくる事は難しい。社会計画をつくる事も困難。長期展望に立って段階的に考える政府がほしかった。質をよくするには競争が必要だけれども、人口が少ないと競争もできない。モンゴル人は、モンゴルの気象と同じで変化しやすい。計画通りには動かない。今のモンゴルの政党はビジネス機関のようになった。ほんとの政党ではない。夢がない。4年単位計画しか考えない。

国立大で見ると、80年代に今の社会のスタートのための根はできた。1942年に国立大が創設されてから優秀な教員がでた。そのなかには社会を変えようとして抑圧され、刑務所に送られ、殺された人もいた。90年改革をするため社会民主党が作られ、その中心に国立大の先生が多くいた。それを支持する人もいた。しかしその後の事態の発展はこうした人たちの期待を裏切り、改革はまだ実現されていない。

21 アマルザヤ (Amartuvshin MARAZAYA 国立大学数学学部教員)

私は1973年トブ県のルンソムに生まれた。ウランバートルからハラホリンへ行く途中にある。父も母も大卒で、父は医者、母は数学教員をしている。父はルンソムで5年間、ブレンソムで10年間、それ以降はトブ県のアイマグセンターで医者をしてきた。この間ウランバートルに入るチャンスはあったが、ずっとソムの医者をしている。地方を大事にしないとイケないという考えだ。今62歳でなお現役だ。

80年7歳で私はブレンソムの8年制学校に入学した。兄弟は4人で、男2人、女2人で、私が長男だ。妹の1人は人文大の経済学の教師で、神戸大学の修士を出た。この10月からは同大学の博士課程に行く事になっている。弟は京都大学の法学部で国際関係論をやり、今東京大学の国際関係学部の修士課程にいる。私は90年にトブ県の高校を出てモンゴル国立大の数学科にはいった。その後日本の都立大数学科で博士を取得した。

私は高校まで地方にいたが、ほんとによかった。空気はきれいだし、人の関係もよかった。社会主義時代の終わりの時期だったが、社会主義時代だったから良かったとは思っていない。単純に地方だから良かったと思っている。社会主義の中国を見て分かるように、地方がいいということにはならない。モンゴルの場合は社会主義とは関係なく地方がよかった。モンゴルが何世紀もかかってつくってきた地方の伝統の良さだと思う。

話は私のライフヒストリーと離れるが私は社会主義を信じてこなかった。あれはいいところはなかった。モンゴルの社会主義はソビエト型や東ドイツ型と基本的に同じだと思う。スパイ網もあったし、多くの人が犠牲になった。国立大の中からも犠牲者は出た。しかし90年以前のモンゴルの影の部分はその証拠を含めて消し去られてしまった。かってモンゴルを支配した人たちはその証拠とともに第1線から退いた。彼らを私は尊敬すべき人とは思わない。

日本にいた頃わたしは中国の文化大革命を描いた「ワイルドスワン」を読んだ。そこで毛沢東の悪行が暴かれている。モンゴルにはあれほどの実証ドキュメントはない。しかし少しずつ出てきている。バブルの書いた「移動民族」などは20世紀モンゴルの歴史や政治の実像を描く努力がなされている。彼は国立大の教員だったが、89年に社会民主党の創設に関わり、国会議員にもなったが、その後政治から退き、20世紀モンゴルの歴史研究に従事している。また30年代の総理大臣で肅清され殺されたゲンドルの娘が自分の高校時代いかに虐げられたかを2000年頃出した本の中で描いている。ゴンチグドルジも国立大の数学の教員だったが、90年の国会選挙に出て、小議会の議長、その後の国会議長になり、教育改革にも積極的だった。

こうして国立大を去って政治の世界にはいった人は多いが、その政治姿勢は皆同じというわけではない。同じく数学教員だったラムジャグさんも国会議員となり、「国民ラムジャグ」といわれ国民から慕われたが、今どこにいるか分からない。国立大のドヨド教授(証言8)はすでに80歳近いが、こうした人たちを教えた優れた教師だ。彼らがドヨド教授からそれぞれどんな影響を受けたか分からないが、ドヨド教授は90年以前の国立大の様子を良く御存知の方だ。(未完)

3 モンゴル国立教育大学関係者の証言

教育大学は、1991年にモンゴル国立大から独立してできた。この大学は、中等学校教員の養成と、初等学校および幼稚園教師の養成カレッジ(primary and kindergarten teachers college, 中等学校)の教員の養成を主たる任務としていた。大学は、4つの学科(academic divisions, 数学, 自然科学, モンゴル語・文学, 芸術)と、3つのInstitute(外国語, 体育, カリキュラム・教授法), 3つのカレッジ(小学校教員, 幼稚園教員, 音楽教育, “師範学校”と呼ばれていた)をもち、地方のエルデネットに外国語教育のInstituteを持っていた。

中等教員の養成学科は5年制で、これには6週間の教育実習が含まれる。またカリキュラムの中には小学校教員, 幼稚園教員志望者のための教授学も入っていて、これらの履修者が小学校教員養成を主たる任務とする師範学校の教師になれた。

Instituteには7つの課程(departments, 英語・英文学, ロシア語・ロシア文学, フランス・ドイツ語・文学, 東洋語・文学, 一般言語学, 教育科学・心理学, 社会科学)があり、この中の教員養成コースは5年制, 通訳養成コースは4年制であった。特に94年以降英語はすべての中高等学校で必修科目になったため, 教育大での英語科の養成教員数は91学年度において700人を超えた。

カレッジは3年制で, 初等教育・就学前教育の教員資格の付与を主たる任務とし, 学士の資格はとれなかった。このカレッジは“師範学校”と呼ばれ, 高等教育機関ではなく中等教育機関と目され, 教員団を含めて大学内での地位は低かった。

以上は1993年ころの教育大学の状況で, それ以降は変わってきているが, それについては別の機会に触れたい。

ここでは以下の3人の証言を得た。ナランツェツェグは小学校教員養成課程の教員であり, オユンとダワージャルガルは中等学校教員養成課程の教員である。ナランツェツェグとダワージャルガルはそれぞれ初等教育指導法改善センターと数学教育指導法改善センターのセンター長で, 両施設ともに私が教育行政アドバイザーをしていたころに, 教育大と協力して設置した研究施設である。彼らは2005年から実施された新ナショナル・スタンダードの作成とその実施に責任をおっており, 新しい教授学の形成に努力している。オユンは, 中等学校の教員養成課程の教授で, 私は今回始めて面識を得たが, 彼女はほかの二人とは違って, 大学の研究者としてのキャリアを積んできていることがヒアリングからわかる。

ナランツェツェグは私がモンゴルに赴任した当初に私のところへやってきた人で, 小学校教員養成課程の改革に熱心だった。彼女はこの課程の教務担当副学部長で, 新ナショナルスタンダードの下での新しい教育内容と授業法の開発およびそのための教員養成に責任を負わされていた。しかしスタンダードの形成グループには小学校教員養成課程の教員は誰も参加していなかった。私はこれには愕然とした。ここにも社会主義時代の悪しき伝統が残されていた。師範学校の教員は大学の教員とは見られず, 中等学校の教員扱いで, 教育省の重要な審議会から重視されなかったのである。新スタンダードや教科書は大学の先生が作るもので, 師範の教師は出来たものを教えていればいいという考え方であった。教育学がいまだに教条を教える学問であり, 実証科学ではない, とする考えがここには見られるのである。私はナランツェツェグのアピールに痛く感激して, この課程に協力することになった。初等教育指導法改善センターの設置はその産物であった。ナランツェツェグの証言からはこのような旧制師範学校が持っていた体質的なものが読み取れるし, 彼女の努力がよく理解できるのである。

ダワージャルガルは教育大学の数学科の教員としてはちょっと異色の経歴を持っている。モンゴルでは国立大学の数学学部を修了した者は、学問・教育の世界だけでなく、政治や行政の世界ではエリートである。モンゴルで出世を望む者は国立大の数学科を目指す。ダワージャルガルは高校時代国立大の数学科に入る資格を取ったにもかかわらず、国立大には行かず、モスクワに出て別の道を模索した。90年の政変で彼はモスクワに居ることが出来ず、モンゴルに帰り、学校の教師をやり、その後モンゴル教育大に入学し、教育大の教師になった。彼は現在数学学部に来た数学教育指導法研究センターの長であるが、ここ3年間このセンターには落ち着いて研究する教員がいなかった。みな腰掛で数学教育の教授学には関心を示さなかった。そうした中であってダワージャルガルはこの地道な研究センターに腰をすえたのである。この姿勢は彼のいままでの経歴と無関係ではないように思う。そんなことがこのヒアリングからわかる。

オユンは前述したように、ほかの二人とは違ったキャリアを歩いてきた。ただし専門がモンゴル語の教授学なので教育大には不可欠の存在である。今回の新ナショナルスタンダードでは新たに「総合学習」という科目が入った。これは小学校3年より高校まで必修科目として位置づいた。しかしこうした科目は従来モンゴルにはなく、その内容作りや指導法に蓄積がない。私はナランツェツェグにこの科目の専門研究者をつくらないといけないと言ってきたのであるが、最近彼女はオユンさんを私に紹介してきた。今後どうなるかわからないがオユンには期待したい。彼女は彼女自身が人民革命党のシンパであることをヒアリングで言っている。私はこれほどはっきりしたことを言った研究者には会っていないが、珍しいことである。

22 ナランツェツェグ(Tserendorj NARANTSETSEG 国立教育大学小学校教員養成学部、初等教育指導法研究センター長)

私は1955年ウランバートルに生まれた。11人兄弟で、上に5人、下に5人いた。幼稚園に入ることができた。ついで8歳で第5学校に入学した。10年制学校で18歳に卒業した。

この学校はロシアとの連携が進んでいて、ロシア人がよく来ていた。ロシア式の教育で、理論的な授業が中心だった。実習などはなかった。ただダワーという物理の教師のみが実験を重視した。家から壊れたものを持ってこさせて、学校で直した。壊れたアイロンを持ってくると、分解して電気の流れを教え、壊れている箇所を修理した。1960年代の頃で珍しい先生だった。少ない事例だが社会主義時代でもいい指導法はあった。

私は教員になりたいとは思っていなかった。国語が好きな静かな生徒だった。しかし研究者にはなりたかった。1973年に大学に入った。成績ではモンゴル国立大に入れたが、裏工作をした別の生徒が校長に推薦されその人が入ってしまい、私の推薦枠はなくなった。校長に抗議したが聞き入れられなかった。私は教育大の国文学コースに入った。教員になりたくなかったので入りたくなかった。入って2週間後郊外での農業実習があった。出るのを断ったが、呼び出されて2ヶ月間の実習をした。小麦や野菜の栽培だった。

入ってよかったのは、国文学コースには当時優秀な教員がいた。また心理学・教授学が面白かった。母のやり方と似ていて興味を持てた。子供に注目し、指導の仕方など実践的な問題と結びつけて考える事ができた。この教師も優秀な教師だった。理論と実践を結びつけて考えるのがよかった。これとは別にたまたま国立大から数学のトムルオチル(証言2)が来て、論理学の授業を始めた。これは面白かった。

3年生で教育実習をした。有名なツエンデのいた学校で実習した。昔話の授業をやり、展示物もよく作った。しかし教師からは「お前の声は小さすぎる」と怒られた。「口のあけ方が下手だ」といわれた。家に帰り練習した。実習成績は“3”だった。私はこのことを通じて二つのことを学んだ。一つは「いい教材や指導法を作っても駄目だ」ということ、もう一つは「教師の声が子供と通うようにならないと駄目だ、声は大事だ」ということだった。成績は3だったが私はいいことを教えてもらった。成績を厳しくつけることが大事だ、そして努力する人が教師になれることを知った。私は“3”を誇りに思っている。この頃の教育大は良かったと思う。いま成績を悪くつけると学生は大学に来なくなる、電話をしても出てこない。こうして苦労して私は教員になった。

1977年第33学校の国語の教員になった。しかし現場の授業は今までの経験とはぜんぜん違った。実習のときとも違った。私は壁にぶつかった。子供と対話する事ができない。中学のクラスで生徒はよく騒いだ。ほかの授業を見て回ると静かだった。私はまだ教員になれていないことを知った。自分の改革が必要だとわかった。ある日生徒に「なぜ騒ぐのか」と聞いてみた。生徒は「先生は優しい、厳しくしないと駄目だ、生徒を殴ればいい」と言われてびっくりした。大学の講義では「生徒を殴ってはいけない」と教えられた。現場では「殴らないと駄目だ」といわれた。私はここで生徒から現場は教育大の講義とは違うことを学んだ。しかし私はどうすればいいのか。暴力はいやだ。授業に生徒が集中するにはどうすればいいのかを考えるようになった。

国語の授業で生徒に面白い話を読んで聞かせた。生徒は集中した。課題を早く済ませて、残った時間に面白い本、エッセイ、昔話などを聞かせた。生徒は集中するようになった。こうしてとにかく大学と現場とは違う事を知った。自分の教授法を作らないと駄目な事を知った。

別のとき、試験で23人の生徒を不合格にした。話す能力はついていても書く能力がついていなかった。不合格をこれほど出したので生徒や他の教師から批判され、私は泣いた。校長からは「あなたは悪い先生だ。この学校でこれほど不合格を出したのは歴史的に初めてだ」と非難された。ところがある先生が私に言った、「この学校では不合格を隠して合格にしてしまう。これはこの学校の悪いところだ」と。この先生は本当のことを話してくれた。私は不合格を不合格にした。これが非難されたのだ。いい学校は悪いところを隠す事を私は知った。校長からはその後「本当の合格者を作れ」と言われた。全員合格者にしろといわれた。私は一人一人の生徒と付き合い、家にまで行って指導した。悪い成績の生徒を放課後集めようとした。しかし来なかった。その後は成績の悪い事は言わないでただ名前だけを呼んで放課後集めたら来た。そして生徒と遊びながら勉強した。教師の言い方が大事な事を知ったし、生徒は遊びながら学習しがっている事も知った。教育大での理論と現場とが違う事をつくづく知らされた。生徒に合わせた指導法を作ることの重要性を知った。

83年ごろ5年毎の教員再教育研修会に参加し論文を書かされた。それを今でも持っている。当時書いた中に「生徒の自己学習を実践的に発達させる」ことをテーマにした文章がある。生徒自身に考えさせて授業する事の大切さを当時私は考えていた。「一番悪い生徒・クラスを私に下さい」と私は言った。教員を育てるのは大学ではなく現場であり、生徒であることを知った。逆に言えば現場の経験のあるものが教育大の教師には必要だ、ということだ。

80年代の前半から私はオープン授業を実践し85年ごろ“オープン授業教員”という賞をもらった。メダルの受賞よりこちらの方が嬉しかった。授業を公開するときだけ“オープン授業”をしても駄目で、いつも公開しないといけない。私の授業は教育大の先生や学生も見に来た。

地方の先生も見に来た。ソビエト教育学の影響はなかった。実践的な授業をやっていた人から学んだ。80年代後半になってソビエト教育学に関する文献を読み始めた。しかし「自分達で勉強しなさい」ではなく、「この本を読みなさい」式の教授法だった。そうした悪い面もあったが5年毎の強制研修は必要だった。いまこれがない。強制研修でもあった方がいい。

80年代終わりには優秀な教頭が来て、グループ授業を始めた。この国では初めてだった。生徒をグループにして協力させた。生徒の興味関心にあわせた授業もやった。ペレストロイカの影響もあって、いろいろな指導法を開発しなさい、と言われた。国立教育研究所のワンチグスレンのように学校に来て「この指導法でやってみてほしい」と言われた。私のいた第33学校は新しいアイデアを生かした。数人の先生が新しい指導法を考えた。90年以降はこうした新たな実践はできなくなった。

1990年になり、経済問題がおきて、教育のことは考えられなくなった。90年代前半教育は減んだ。親は子供を気にしなくなった。教員だけが教育していればいい、となった。優秀な教師も自分のことだけ考え、学校を辞めて商売などに走った。学校に残ったのは力のない教師だけだった。子供も学習に熱心な子はいなくなった。頑張る子供はいなくなり、成績だけを気にするようになった。賄賂が横行し始めた。教員から始まったようだ。私は賄賂をとらなかった。そして「なぜとらないのか」と叱られた。

社会は自由になった。勉強するかしないかは子供の自由だ。勉強を強制するな、といった風潮になってしまった。90年で“解放された”というが、その意味は分からなかった。民主主義になり個人の責任は高まると思った。しかし反対だった。差別がなくなり、平等になると思った。教員の責任は高まると思った。しかしそうではなかった。第33学校の教員の3分の1は辞めた。多い学校では半分がやめた。給料だけでは生活できない。インフレはすごい。商売に転進するしかなかった。酔っ払いが増えたのは93年アルコールのカードが配給されるようになってからだ。

大学もいい教師を失い始めた。現場教師から試験をして大学教員を採用した。私もこの試験を受けて教育大の教員になった。心理学、教授学、ロシア語、専門教科などの試験だった。私はそれほど目的があって受験したわけではない。学校の友人から誘われて受けた。10数人受けて第2位で採用された。担当科目は「近代モンゴル語」だった。理論だけ教えた。96年ごろ国語科指導法の教師がやめた。それで私がこの教授法を担当した。「自分で考えてやれ」と前任者のルハーフから言われた。私は97年からは小学校国語指導法に集中した。学生に考えさせる事を中心にしたが、学生は考えなくなっていた。新しいことを試行しようとしても、そんなことできない、という。90年以前と違って自由に授業を形成できるようになった。「・・・しなさい」式ではなくなった。自分の研究を活かし、考えたものを実践に生かせることになった。しかしまだこのいい条件を活かしきれていない。

23 オユン (Tserentsorubin OYUN 教育大教授, モンゴル語教育)

私は1949年ザブハンのアイマグセンターで生まれた。兄弟は4人だった。父が離婚し家を出たので私達は母に育てられた。また長男が教員をしていたので、この長男にも育てられた。アイマグセンターの学校(8年制)を出て、アルハンガイ県のツェツェレグの師範学校に入った(1963-7年)。当時師範はウランバートルとツェツェレグにしかなかった。西部地区の教員はツェツェレグで育てられた。西部の各県からトラックに載せられて師範に集まった。

ザブハン県は教育セクターの中では有名な県だった。質が高いといわれた。ザブハンから学生を受け入れるのは歓迎された。この県からは4人の活仏が生まれた。オチルバトやバガバンデイなど90年代の大統領もザブハンの出身だ。国立大のブルマーさんや教育省のルブサンドルジもここの出身だ。70年代のザブハンの教育は盛んで、優秀な人を出した。今は他の県と差はなくなった。

師範の教員は優秀だった。われわれは恵まれた。卒業後7年間ザブハンに勤務した(67-73年)。小学校が中心だったが、5・6年生のロシア語も担当した。当時の教師は能力があった。いい教育をやった。自己活動能力があった。今の教員は能力が低い。技術的環境がよくなったのでそれでカバーしている。黄金時代だったように思う。皆熱心だった。

1920-70年の教員の特徴は授業を教えるというより、大人として子供に対応した。校外活動、芸能・文化活動、夏休みの労働活動、カシミア作りなど生活のいき方を教えていた。今は自分の専門さえ教えていればいいという風潮だ。

私は学校へ家から通った。それに比べ寄宿舎の子は自己判断力がついた。社会主義時代の寮は条件が良かった。何でも与えられた。小さい頃から自分の面倒を自分で見てきた。逆に自分中心で自分のことしか考えない。いい点といえば、学生は社会のいろいろな分野に入り働いた。農業活動をし、野菜畑、建設などやった。勉強し、生活し、労働した。それは“黒手”の学生だった。今の学生はこうした事をしない。“白手”の学生だ。

1973年に私はウランバートルの教育大学に入った。モンゴル語を専攻した。大学生は皆奨学金をもらえた。成績による差はあったが、生活できた。今は逆に授業料を払う。かつては平等原理があった。家庭の経済格差には関係なかった。今は格差が目立つ。私立の学校も増えた。社会主義時代の生活については、最近ロシア人で社会主義時代の人からヒアリングした本が出ている。これは参考になると思う。

私は大学で学生委員会の長をしていた。優秀な学生はロシアに派遣された。私も75年と77年の2回1ヶ月ずつウラーンウデとイルクーツク教育大に送られた。“ロシアから学ぶ”というのが合言葉だった。70年代まではロシアだけからまねをした。教員中心型の教育論で子供中心型ではなかった。ソビエトの指導は大きかった。80年頃からヨーロッパの教育事情が少しずつ入ってきた。

1977年に教育大を卒業し、2年間ウランバートルの学校に勤めた(77-80年)。80年に高等教育委員会に職員(モンゴル語担当)として入った。教員担当専門官というポストだった。学生時代の担任教員(ボルド)がこの委員会に勤めていて、そのひとの紹介だった。80年代は教育分野の組織変化が大きかった。81年に教育省ができて高等教育委員会もここに入り、私も教育省へ移った。エンヘトブシンが部長で、ベグツ(証言6)、バンデイ(証言15)、バタリンチン、ランバー(いま国会議員)などがいた。ここでは大学教員の任命の仕事をした。大学教員は大臣委員会と革命党の運営委員会を通らないと駄目で、私はそのための資料作りなどの仕事をした。ゴンチグドルジ、トグミットなどの学長クラスの審査をした。89年には離婚し、別の人と結婚した事もある。教授学研究所に左遷された。ここで97年まで勤めた。これは教育省の附属機関で、研究ができた。ここで私はテーマを選び、研究者になった。97年にPh.Dをとり98年に教育大の教員になった。97年にはDr. of Scienceを取得した。05年に教授になった。言語大学長のガルサン教授(証言7)とは高等教育委員会とそれに続く教育省で一緒だった。彼は委員長だった。モンゴルのロシア語研究者のリーダーだった。厳しいが、やさしく、勇敢

のあるいい先生だった。

最近の仕事でいうと、私は小学校および高校のモンゴル語の教科書を執筆してきた。ナショナルスタンダードやガイドラインの作成にも参加した。教員養成のディダクティクの教科書も書いた。国語のディダクティクでPh. D.をとり、「モンゴル語のディダクティクと理論」でScience Doctorをとった。今後は教育改革の分野でも仕事をしていきたい。

1990年の改革については、社会主義時代には私は行政機関にもいたし、81年以降は革命党の黨員でもあった。個人的には、今のような社会は必然的だったと思う。90年に党費が高かったので革命党をやめた。私は民主社会に賛成だ。今では革命党も民主党もリベラルで、ともにいいところも悪いところもある。ただ人材は革命党の方が多い。選挙では私は今でも革命党を支援している。

24 ダワージャルガル (Legden DAVAAJARGAL 教育大学数学教育)

私は1964年ドンドゴビのデレンソムに生まれた。ウランバートルから210キロくらいのきれいな草原だった。兄弟は8人で、上6人が姉で私と弟は7・8番目に生まれた。1番目の姉は遊牧、2番目は教師、3番目は医者、4番目はモンゴル語、ロシア語の教師でグールカレッジという外国人向けのモンゴル語学校をつくっている。5番目は数学の教師、6番目は建築技師で自営、弟は店を営んでいる。父・母は遊牧民だったが、84・5年に相次いで亡くなった。ネグデルができてからの遊牧民で、優秀牧民で表彰された。家では75頭の家畜を飼っていた。馬が20頭くらいいた。牛は数頭でミルクをとった。あとは羊、ヤギだ。ネグデルでは父と母で6-700頭の羊、ヤギの面倒を見た。当時は遊牧民の場合75頭まで家畜を私有できた。公務員は10頭までだった。私の家は裕福だった。

72年にソムの8年制学校に入ったが、第7学年よりアイマゲセンターの10年制学校に移った。ソムの学校は家から12キロ離れていて、秋・春は馬で通い、冬は1年生から寄宿舎に入った。ソム学校の教員は今よりも力があつた。子供は素直だった。はじめは6×8メートルくらいの4年制の小さな学校だったが、私の在籍中に8年制になり大きくなった。学校には遊牧職員というのがいて、家畜を飼い、肉などを寮の食事に出していた。私は算数が得意で、5年のときアイマゲで優勝した。

第7学年になるときアイマゲセンターの第1学校に数学の特修コースができて、私はそちらへ編入された。ソムからはここへ2人入った。ここにウルジーという先生がいて、彼は後に大統領より“功労教員”賞を受けた。このほかにこの特修コースには3人の優秀な数学教員がいて、いっそう数学が好きになった。9年のとき(81年)全国数学オリンピックで3位になり、10年卒業後モンゴル国立大学に入る権利をもらった。

しかし高校卒業後私はモンゴル国立大に入ることを断り、モスクワ大の国際交流学部に入った。82年1年間ウランバートルで体験コースに入り、成績はBだったが、遊牧民の子は優遇され、83年からモスクワへ行った。2年間国際コミュニケーション経済学部で勉強したが、数学の勉強はないし、フランス語で脱落し3年の時は大学へ行かずに遊んだ。姉達心配してモスクワに来て私はモンゴルに帰され、86年よりドンドゴビのツァガーンデルゲルソムで中学校の数学を教えた。そこで2年間教えたが、88年に国立教育大の数学科を受験し、合格して93年まで5年間勉強した。入学試験の成績は良かったようだ。ドンドゴビのウルジー先生が心配して入試の結果を見に来てくれたが、「7年間数学を離れていたのに良くやった」と言っ

てくれた。入学試験はアイマゲセンターで受ける事ができた。私はモスクワにいたとき“クワング”という数学の雑誌を良く読んで、数学オリンピックに出るような問題を解いていた。これが良かったと思う。

83 - 86年モスクワにいた頃ペレストロイカが始まり、ちょうどゴルバチョフが出た頃私はモンゴルに帰った。モンゴルのペレストロイカが始まったころ私はモンゴルは今よりいい社会になると思った。私はすでに結婚して子供もいた。デモにも参加し、社会民主党にも入った。当時革命党史やマルクスレーニン主義を教えていた教師に学生は授業中に新聞を引き合いに出し、教える内容と現実との違いを指摘し、教師は答えるのに窮していた。この歴史の授業には学生はいろいろな学部から来て一緒に授業を受けた。物理・数学の学生が特に積極的で本気で新しい社会民主党に入った。他方モンゴル語や美術の学生は消極的だった。教師の方は、若い教師は積極的だったが、年輩教師は1人を除いて消極的だった。国立大のラムジャグは社会民主党の創設者で、私は良く知っていたし、いい教師だった。90年以後選挙に出て国会議長をしたゴンチグドルジも国立大の数学の教師だった。

モンゴルのペレストロイカには私は積極的に関わったが、そこで期待したような社会は生まれなかった。現在のような社会を欲したのではない。悪い社会になったし、私は気に入らない。党员になることもいやになる社会だ。教育大の数学研究室もあまり変わらなかった。大きな改革はなかった。動きは見られず、改革を試行する人は少ない。年輩教師の意識は変わらないし、自分の旧来からの指導法を変えない。いま数学の新しい指導法が求められているのに、若い改革志向者を否定しがちだ。若い教師で大学を去る人も出ている。しかし年輩教師も退職する人がいて、60歳以上は2人だけとなった。トクミッドさんを中心にカリキュラムの改革もできそう。ジャダンバ学長は教員の社会保障の改革になかなか取り組めず、教員の世代交代もなかなか難しい。

数学教育指導法研究センターは私がセンター長であるが、JICAのプロジェクトが始まって使えるお金がないので、国立大学や他の学部の先生と協力する条件ができない。教育大の4人の教師だけでワーキンググループを作りやっている。モデル学校の教師は今まで大学と共同してこなかった人なので、ちょっと大変だ。われわれが共同してきた現場教師をプロジェクトに加える事ができない。

Ⅲ 私立学校の沿革と関係者の証言

1 私立学校改革の沿革

1992年の新憲法第15条により私学設置の自由が認められた。そこには「市民は国の定める要件を満たすならば、私立学校を設置し運営することが出来る」と書かれている。憲法発布後に政府は1993年に正式にNational Program of Action (NPA) for the Development of Childrenをつくった。これは憲法発布後の国の教育基本政策であり、そのプログラムの中には、「私立幼稚園の開発」という項目が入っている。私立中等教育学校の開発という項目が見られないので、私立小中学校の設置根拠がいずれにあるかわからないが、いずれにしても私学の設置は自由となった。

教育統計を見ると、私立幼稚園は1995年に22校、2001年に38校となっている。2000年に降増えている。私立の普通初等中等学校（モンゴルでは「普通中等学校」という）は1996

年に2校、2001年に85校となる。1999年以降急増している。高等教育学校は、1995年41校、2001年130校となり、2000年以降急増している。

私立学校関係の統計や資料に欠けているので正確なところはわからないが、私の経験から言えば、2003年以降で見ると私立学校はほとんどのアイマグセンターにはあるようだ。これらは高等学校レベルが多く、大学進学の子備校的な存在となっている。ウランバートルでは「中等学校」としての一貫学校が多い。ただし高校だけの学校も見られる。それぞれ特徴を持っているが、共通するのは外国語と数学の授業が重視されている。また公立小学校を卒業して私立学校に転入する生徒も目立つようになった。概して言うと、首都では私立学校の評判は高くなっており、私学の通学者は3割を越えていると思う。

いずれにしても、私学は教育実践面で新しい試みをして市民をひきつけているが、授業料は高い。かくして教育での格差はひろがる傾向にある。

2 私立学校関係者の証言

ここでは私立大学2校、高校1校、小学校1校を紹介する。いずれも注目できる教育実践をしている。

ソヨルト校長が設立した文化教育大は、日本語・日本文化の教育を基調とする大学で、モンゴルと日本の経済・社会・文化交流を将来支える青年を育てることに主眼を置く大学である。ソヨルトは内モンゴルの出身で、文化大革命のさなか家族や親族から多くの犠牲者を出している。彼はそんな中国を脱出し、日本を経てモンゴルに入り、90年代前半にこの大学を作った。モンゴルには、日本との交流を盛んにし、モンゴルの独立・平和・繁栄を願う人が20世紀初頭から多くいた。彼らは親日家として社会主義時代には抑圧されてきたが、そうした伝統を持つ人がモンゴルにはおり、ソヨルトもそうした人間の一人である。文化教育大の教育実践については別に紹介したので、ここでは彼の経歴を中心にヒアリングをした。(北大生涯学習計画研究部『大学教育における大学・地域パートナーシップの開発過程に関する国際比較研究』、2006・3, pp. 171)

オランチメグはウランバートルから西南へ500キロほど離れたバヤンホンゴルのアイマグセンターにあるホンゴル大学の教務担当副学長である。学長はアディヤ教授で前回の「証言」の中で紹介した(証言10)。この大学はモンゴルでは珍しい地方私学であり、バヤンホンゴル県の地域開発に貢献する青年を育てるために2000年に設置された新しい大学だ。大学には4年制だけでなく、高校(農業課程)、通信制、夜間成人学校などがあるほか、最近ではウランバートルの国立農業大学の大学院とも教育連携を始めている。こうしてホンゴル大学は大学・地域連携だけでなく、学校間連携を深め、教育・研究・産業開発での地域的ネットワークの中心にあり、オランチメグはその推進人物の一人である。彼女の教育実践については、2004年に開いた北大での共同シンポジウムでの報告を付属資料としてつけておいたので、それも参考してほしい。

新モンゴル高校のガラー校長は、国立大学で物理を専攻し、卒業後大学や中等学校で教職を経験した。90年以降勤めていた学校での経験から、彼は日本の教育を学ぶために山形県に居を構え、山形大学の教育学研究科の修士課程に入った。日本の戦後理科教育史を学習指導要領や教科書を通して分析し、修士論文を書き、ついで東北大学の教育学研究科の博士課程に入った。そこで彼は、モンゴルの高校は現在2年制であるが、3年制に移行することを見通して、3年制高校カリキュラムの開発に取り組んでいる。とはいえ彼は博士課程に入ってからモンゴ

ルに帰り、山形県の友人知人の援助を得て新モンゴル高校を作った。この高校は日本の進学高校のカリキュラムを参考にして、3年制の履修コースとなっている。彼の博士論文はここでの実践がベースになっている。ガラー校長も将来のモンゴルを次世代の教育に託して私立学校を作った一人である。(なお新モンゴル高校に実践については、森 修『モンゴルの日本式高校』、河北新報出版センター、2005年、参照)

ダルハンのナラン学校のミジド理事長は異色の人である。モンゴル国立大では工学部で通信工学を専攻し、卒業して通信技術に関する新しい型の学校をユネスコの援助を得て創設した。従来型の専門教育が実験実習を軽視したのに対し、この学校は実験実習を重視し、国立大学だけでなく、専門学校や中等学校の授業の実習施設として開放された。90年以降は自分で企業を起こし、電池やテレビを作っていたが、アメリカの会社のアジア支社の担当となり、日本をはじめ東南アジア諸国を廻って歩いた。その際に彼はモンゴルの教育の遅れを痛感し、5年ほど前にダルハんにナラン学校を設置した。授業はすべて日本語で行われている。来年からは中等部が出来る。いずれ高校を作ることになるが、彼は普通課程のほか専門課程を含めた学校にするという。卒業生はウランバートルに出るが、すでに文化教育大と姉妹校提携をしている。ミジド理事長もモンゴルの未来を次世代の子どもに託し、そのための私立学校を開いた一人であった。

25 ソヨルト (SOYOLTO, 文化教育大学学長, 日本名: 牧原宗一)

私は1960年内モンゴルのシリングルで生まれた。遊牧民の子どもだ。

文化大革命のとき郡長をしていた叔父が殺された。叔父の罪をその弟である私の父が問われ、何度となく拘引され、辱められ、1ヶ月も家を空けた。母も同様で、兄は強制労働に徴用され、いなくなった。兄弟は7人で、私は4番目だった。家事は2歳上の姉と私とでやった。乳搾りは女の仕事だったが、私がした。12歳のとき初めて家族の写真を撮り、汽車を見たのは16歳のときだった。第7学年の中学で学校をやめた。数学・物理が好きだった。

その後独学で勉強し、1981年21歳でフフホトの大学に入り、日本語を専攻し、85年に大学を卒業し、師範大に就職し日本語を教えた。そこには日本から日本語教師が来ていて、私はその娘と結婚し、1988年に日本に渡った。内モンゴルは自治区とされていたが、実際は文化大革命のあとも弾圧が続いた。これはチベットも同じだった。私はこうした内モンゴルから逃れて日本に来た。90年にもとの自分の国モンゴルにもどりたくてウランバートルにやってきた。モンゴルのスフバートルは私の家族のふるさとで、今でも親戚がいる。私はいまモンゴルで日本語日本文化を中心とする大学を経営しているが、それは私が日本に行ったからだと考えている。

今のモンゴルはこのままだと減んでしまうのではないかと私は心配だ。モンゴルの歴史家にザルーチンという人がいる。現在92歳だ。内モンゴルの抑圧をテーマにした本もある。彼はモンゴル人がモンゴルをだめにした、といている。「外モンゴルは、ロシアのスパイだ」「内モンゴルは、中国のスパイだ」という教育を我々は受けてきた。肉のついていない骨を奪いあいしているようなものだ。笑っている人は誰か考えない。今のモンゴルは中国の犬みたいだ。セレンゲの木の間伐採をみてわかるように中国人はモンゴルの自然を破壊している。ウランバートルにはカジノがいっぱいあるが、そのオーナーのほとんどは中国人だ。いまスフバートル広場に大きなホテルが建設中だが、これも中国の資本でつくられている。中国からおおぜいの男

性会社員がモンゴルに来ているが彼らはここでモンゴルの女性を買う。ペキンの街角にはモンゴルの女性が立っている。こうしたことに目をふさいでいるモンゴルでは将来がない。

いま私の大学から83人の留学生が日本に行っている。研修生は80人が日本に行き、昼間は大学で、夜は企業で働いている。研修は愛知県の星城大学と提携している。彼らのほとんどがモンゴルにもどり、就職する。今年の日本政府留学生試験では10人が採用されたが、このうち5人が本学の生徒だった。過去6年間にはこの資金で本学から21人の学生が日本の大学に留学している。

大学創設以来識字移動教室をやってきた。学校に通えない遊牧民の子どもを相手にトブ県（中央県）でやってきたもので、多い年で1500人少ない年で700人が参加した。合計11000人がこの教室に参加し基礎教育を受けた。これらも本校の大学生が実施したものだ。3年前からはさらに失業している若者を対象に職業訓練事業を始めた。ブレン郡ほか2箇所にフェルト加工工場をつくり、羊毛を集め、フェルトに加工し、それを売る。最近羊毛の値段が安くなり、7月になっても毛を切らない羊が出てきている。本校が10キロ3000Tgで買い上げ、フェルトにし30キロ25000Tgで売る。

本校には夏季ツーリストキャンプ場があり、100人宿泊可能だ。すでに10年以上続けており、日本や外国のお客が多い。毎年来るリピータも増えている。ウランバートルから60キロ離れた野生の草花が咲き誇る起伏の多い草原にある。乗馬コースもあるし、炊事も出来るし、野外ステージがあり本学所属のモンゴル民族音楽舞踊団が公演する。これからは冬季スポーツのキャンプ場も開設する予定だ。ここで学生が日本語の実習その他の実習をする。乗馬インストラクター、ウエイトレス、炊事、管理その他必要な仕事すべてを学生が実施する。近所の遊牧民を訪問する企画も作った。学生はほぼ強制的に参加する。ここでスポーツ大会をするし、キャンプ場周辺の山で学生は一人3本の植樹を課せられている。北大の東さんが開発した“紙ネッコン”という植樹法で、紙で作った箱で木の根を包み、それを植える。80%が根付く実績を示した。

本学には48人の教員がいるが、日本人教師は9人いる。1-2年の契約で雇用している。日本で正式に日本語研修講座を受けた人に来てもらっている。日本人教師に来てもらうのはなかなか大変だ。いつでも日本人教師を求めているので小出さんのNPOにも協力してほしい。ここにあるパイプすや折りたたみの机は日本から持ってきたものだ。こうしたものも必要になっている。今の建物では手狭なので新校舎を作る予定だ。地上5階建てで日本人教員の宿舎もこの中に入る。来年9月完成予定だ。すでに多くの日本人からの寄付が集まっている。日本モンゴルの教育交流の拠点であるこの大学をもっといいものにしたい。

26 オランチメグ（Khalzan URACHIMEGホンゴル大学教務担当副学長）

私は1963年バヤンホンゴル県のザグ・ソムに生まれた。家族は8人で、父は地元の開発委員会の会長をしていた。傍らコックや庶務・会計の仕事もやっていた。母は小学校教員で36年間勤務した。熱心な教師だった。姉は遊牧民、妹のひとりには農業大の獣医を卒業し、もう一人は教育大の国文学科を出てホンゴル県の総合学校の教頭をしている。弟は二人いるが、一人はウランバートルから東へ100キロくらいのバガノールで幼稚園の会計担当をしているし、もう一人はウランバートルで運転手をしている。

小学校はザグ・ソムで7学年まで通学し、生徒のリーダーとして頑張った。校外活動や社会

活動をよくやった。7年生のときジャルガラント・ソムの10年制学校に移った。農牧業の発達しているところで、地域のセンターだった。転向してからもリーダーで、“いい生徒”で賞なんかもらった。高卒後は国立教育大から招待状をもらって入学した。地理・歴史学科に入った。農牧業と地理に興味を持っていた。大学の青年学生委員会のリーダーもした。

85年に大学を卒業し、教育局の指導主事になってくれといわれたが、出身地の学校に戻り教員をした。教員としては“優秀教員(A)”と評価された。地元の社会主義社会開発青年委員会でも活躍した。こうした事がホンゴルの県委員会に伝わりぜひアイマグセンターに出てきてほしいと言われた。87年7月にアイマグセンターに出て県の公共サービス機関の局長になった。食事・洗濯・掃除・裁縫など住民の日常サービスの業務についた。また革命青年委員会の会長にもなった。私は教育分野の仕事がしたかったので、その後県の子供サポートセンターの主事になった。しかしこの頃よりペレストロイカなど社会変化がおき始め、89年にはサポートセンターがつぶれた。私は再びアイマグセンターの総合学校の教員になった。

私はすでに結婚しており、子供も二人いた。夫はモンゴル国立大の警察学科を卒業し、ホンゴル県の警察署の犯罪課の局長をしていた。しかし95年に犯罪者により殺された。夫が亡くなってからは大変だった。

2000年に農牧業大学のアデイヤ教授(証言10)がバヤンホンゴルにホンゴル大学を創設し、私は教務担当副学長として招聘された。給料は下がったが、私はほかの分野を見たかったし、自分を改革したかった。子供はまだ小さくて大変だったが、私は移った。3人の教員と私とで大学をつくった。アデイヤさんは私大協会の事務局長でウランバートルにいた。だから私が中心になって大学作りをした。何よりも県民に大学を理解してもらわないといけなかった。県民と協力して大学作りをした。私は総合学校では2回卒業生を出した。2回とも優秀卒業生として評価された。優秀中等学校教師としての評価があったから私は大学に移ってもやれた。各地で大学の説明会をし、行政のサポートを受け、県の活動の場に行っては大学について話して回った。子供を10日以上ほうっておく事もあった。最初は大学の規則や公式文書が二つしかなかったが、これを24に増やし学生向けや教員向けの文書や規則を整備した。ウランバートルにはたびたび出て、大学調査を独自にやった。こうした努力の結果今では県内ではもっとも進んでいる学校として評判が高くなった。

昨年北大の町井教授の招聘で北海道大学へ行ったが、帰国後10日間の準備をして、大学5周年記念とあわせて研究シンポジウムを開いた。5周年をただ楽しむのではなく、人間精神を開発する目的で高等教育の意義についてシンポジウムを開いた。北大のシンポジウムについても紹介した。ウランバートルの農牧業大学から数人来て発表してもらった。自己学習や選択科目を重視したカリキュラム開発もした。学生も教員も研究者という立場で社会に貢献する条件を作り出してきた。講義型の教育ではない教育をしよう、学生に“生きる力”を育てる教育開発をしよう、として現在も頑張っている。学生はこの大学をよくするために協力してきた。就職探しも私も一緒になってしてきた。その結果就職もよくなり、ほとんどが就職できるようになった。

1990年当時のことについて言うと、私の勤めていたサポートセンターはなくなり、ソムやアイマグの機関もなくなった。青年委員会もなくなった。多くの人の職場はなくなり、給料は下がり、インフレがおき、生きることが大変だった。社会主義社会がなくなってしまった。私はこの転換を応援していた。私は社会民主党の女性運動委員会の会長をした。この党には教員

や医者が入っていた。これは私にとってとてもいいことだった。人は自分のいいたいことを言うようになり、自分を試す事ができ、自分の資産を持てるようになった。こうした事はいざれ実施しなければならなかった。これは後退ではない。

前に言ったように私は89年に再び教員になった。しかし新しい教育はヨーロッパやアメリカの真似で私には気にいらぬ。モンゴルの子供の特徴にあつていない。私は学校に戻つて、子供の精神や心理に関心を持った。子供をどうやってサポートしたらいいのか、貧困や食料不足、こうしたときにどうしたら教育に熱心になれるのか。生徒が生徒を教える事も考えた。これで生徒の学習を促進できた。社会開発は人間開発だ。小さいときから子供の精神を開発する事が大事だ、と考へて努力した。

今の社会政策は人間を向いていない。国民のニーズを知らぬとしぬ。社会の問題を調査せず、先進国の真似をしている。市場経済も発展してない。ナショナルスタンダードは変わった。しかし教育のニーズに合っていない。行政が基準を作つてからほかの人の意見を聞く。作る前に意見を聞かぬ。これではまずい。数学の統一試験をやり、それで評価するのまずい。職業教育をすることの方が大事だ。子供中心といいながら、内容が子供にあつてない。モンゴルのことわざに「言うことは上手だが、やることは下手だ」というのがあるが、そのとおりだ。教育の法律はあるが子供をサポートしてない。行政職員をサポートしている。社会主義から民主主義になつたとき、子供に一番気をつけなければいけなかつたはずだ。だから私は子供の心理に注目した。

モンゴルの子には自由がなかつた。解放されてない。親の拘束が強い。当時は配給制でもなかつた。子供が一番困つていた。親が子を理解しないとだめで、学校に子供サポート委員会を作つた。これに親がボランティアとして参加した。教員だけでは駄目で、親の参加が必要だつた。オープン授業をやり、親の助けが子供に必要なだつた。こうしたことで当時の難局を切り抜けた。10年制学校の間に子供の能力の発見が必要で、これを重視して他の教員と協力し合つた。アイماغに子供センターがあつて、そこから評価され、「優秀教員」「優秀クラス」の賞をもらった。学校に教科別委員会や女性委員会を作り私は委員長などをしていた。

90年以降アイماغの人口は5000人増えて、今84000人いる。アイماغの知事やソム長の政策がよかつた。家畜なども増えた。知事部局の役所には優秀な人がいた。特に社会開発部が頑張つた。県民の日常生活の面倒を見た。教育と社会開発に熱心なソムでは、人口が増えている。人間が開発されれば地域の安定開発も進む。こういう人間は自分で考へて動き出す。それを政府が援助する。人間の自己開発が重要だ。

モンゴルの社会主義時代の教育についていい面があつた。質のいい教育ができた。特にテストの仕方は良かつた。多くは文章題で、今のような○×式ではない。自分で考へて表現しないといけなかつた。また試験の結果に基づいて生徒を指導できた。教員と生徒は協力し合つた。教師の責任も大きかつたし、子供の責任も大きかつた。テストにより子供が理解しているかどうか分かつたし、教員の欠陥もわかつた。まへもつて試験問題を10-30題出しておく。基本的に知つておかないと駄目な事がそこに入っている。子供はそのための準備をする。実際の試験はそのうちの1題を出す。どれが出るか分からない。だから子供は全部にわたつて準備する。また書く・話す力も重視した。発表力がつた。今は子供中心といいながら自己学習力がついているのか心配だ。民主的な環境ができないうちに新しい教育に変わつてしまつた。教員の責任が弱まつた。試験も子供は大体こうだろうと考へて○×をつける。カンニングも横行してい

る。

とはいえ社会主義時代は自分の言える事を言えなかった。上から言われたことをするだけだった。社会開発はよくいったと思うが、言えることを言えない社会では駄目だ。それが最近になってまた言えることが言えない様な社会になってきている。これがモンゴルの民主社会を良くしていない。法律にはいい法律もある。しかしそれは実現されていない。

【付属資料】北海道大学生涯学習研究部・シンポジウム「大学と地域連携」でのオランヂメグの報告：「モンゴルにおける地方大学と公共機関とのパートナーシップと参加」

現在世界は科学技術の改革が円滑に進み、知的レベルの高い産業・サービス分野が発達している。モンゴルの発達もこの方向に進んでいる。

これに伴い高等教育の必要性や条件も都市・地方で高まっている。モンゴルは市場経済への移行に伴い、高等教育の修得は人間個人の問題となり、それに要する費用も個人負担となっている。産業の発達に伴い新しい専門を身につける必要が高まっている。それにより高等教育は学生の自己活動を高める教育機材などを改善し、ネットワークの拡大・改善を図る必要がある。ここから学生向けのサービスを高め情報設備や近代設備をするため外からの投資を高めるニーズが発生している。だから私たちは地方の学生の教育機関を整備するとき以上のことを考えるほか、このような分野で地方公共機関と協力する必要が生まれてくる。

本校はアイマグ（バヤンホンゴル県）の12のNPO機関や公共機関と交流し、社会・アイマグ・国の発達に貢献するため教育活動をこのような方向に向けている。私たちは高等教育サービスを地方に近づけ、住民・子ども・青年が生活や職業からはなれず、安い経費で質の高い生涯教育やその前段階教育を受ける条件を整備してきた。今後もこれらをもっと改善するためやっている。現在は学生を教育するためには政策の立案調整以外に、非政府組織や公共機関の役割とそれへの参加とが重要となっている。

わがアイマグでは学生が安定して就職できるように、バンキング、アカウント、ビジネス・マネジメント、農業（果物・野菜）、畑作の専門人材を育成するため私たちと外部機関とがいつも協力してきた。私たちもこの分野の職員を重視するようにしている。卒業生が都会へ出ることをやめ、教育・文化サービスを地方に向かせる課題は誰もが考えなければならない課題である。だから私たちはアイマグの労働局、社会保険局、財務経理協会、社会政策局、教育文化局、青年協会、女性連盟、シニア委員会、ラジオ・テレビ、文化芸術協会、銀行、税務署、保険機関と協力し、アイマグの開発方針を作るに当たって共同し、交流し、調査研究し、会議を開いている。

また能力の高い、複数の専門分野をもつ人間を育成するため、長期・短期で学生を実習させ、研修生として働かせ、学生が、自分が社会において役立つ領域を正しく評価し、自分のものにし、自己評価能力を高めるため、アドバイスし、段階的に活動している。このため学生や卒業生、労働提供者、勤労者から多様な研究・アンケートを行い、本校の活動方針を作っている。また学生から年に2-3回感想文を集め学校管理職や教員が自己活動を評価し、教員と学生という二つのグループが本校の教育活動を評価している。また第3者が評価し、教育活動を改善するためのいい条件を作っている。

私たちは、初等・中等・高等の3つの段階で教育を開発し、その接続を改善し、人間各自が生涯教育を受けられるように支援し、協力している。こうした開発方針を作り、知事や役所の

戦略目標の中に取り入れさせている。この分野でアイマグの知事、役所、財務経済政策局などが、その地方開発政策に教育開発を取り入れていることを私たちは喜んでい

わが校は西部地域の研究・学術・文化・教育のセンター学校になるため、長期・短期の目標をあげているほか、日本の学校と交流し、国際交流活動を深めたいと考えている。地方開発は、農業技術に限らず、経済・社会・科学・技術・自然・環境の分野で課題を含んでいる。過去数年にわたりモンゴルのエコロジー・気象に異常な変化が現れ、モンゴルの農業セクターに大きな被害を与えてきた。だから農業セクターに先進技術を導入する必要性が高まっている。

アイマグの課題や、これらの困難や目標全体を解決するため、わが校の役割はもっとも重要になっている。わが校の教育・学術・研究・技術をあげて社会に向けたサービスをする必要性・条件が生まれている。NGO、公共機関と協力し、それらの持つよい点を学んでいくと効果的だ。現在世界では突出した社会・文明・教育はなくなり、世界全体が似てきている。また世界の国や地域がますます近づいてきている。すべての人が受け入れる技術・情報を使って人類精神が作られ、近づいている。世界に人間重視の社会を作るためNPOが一番大事な生命を持っている。なぜかという人々が自分の関心・興味でNPOを作り、目標を実現するため、ボランティア機関を作り、現在の困難や、政府のできないことをやっている。これが重要だ。NPOは住民の声となっている。それらを支援し、それに聞き、アイデアを生かすことが一番いいと考える。わが校はそうしたことを支援しているし、そうしたことをやってきた。私はそれを誇りに思う。

27 ガラー (GALBADRAKH, 新モンゴル高等学校校長)

私は1963年5月アルハンガイ県ツェツェレグで生まれた。4歳の時父がウランバートルに転勤になった。父は獣医で、農業省に専門官として雇われていた。ウランバートルではトブ(中央)県を担当した。9人兄弟で上から3番目だった。小学校は第44学校に入り、中学・高校は第53学校だった。1981年に国立大の数学・物理学部に入り、学科は物理だった。5年間就学するところを4年間で修了し、1年間はトブ県アイマグセンターの第1学校で物理を教えた。この学校では物理オリンピックで金・銀をとったり、バスケットを指導し県大会では4位になった。86年に大学にもどり、国立大の付属高校の物理の教師になった。しかしトブ県の事務次官からトブ県にぜひ来てくれ、ということで、単身トブ県に行ったが、妻の父が倒れたり、私の3女が病気になったりして、トブ県の教師をすぐやめざるをえなくなった。

トブ県の教師をやめ、職がなくなったが、農業大学予科(大学準備教育)の物理教師の採用試験があり、それを受けて採用された。予科の学生は遊牧民を採用していたので、学生は私より年が上だった。ところが90年に国は予科を廃止したので、私のポストもなくなった。当時の学部長は国立教育研究所に移り、私に誘いがあり、私も研究所へ移り、研究員となった。1993年まで研究員をしていたが、93年にいま国会議員をしているランバーさんが教育改革の一環として幼稚園から高校までの一貫教育学校(エルテム総合学校・公立)をつくり、私に副校長をやれといわれ、95年の10月まで2年間そちらにいた。この5年間で私は教育分野でいろいろな体験をした。

私はモンゴルで新しい教育、新しい学校が必要だと考え、日本に渡ることを考えた。私は日本語を出来なかったが、日本の国費留学生(教員訓練コース、1・5年)に合格し、95年10月に東北大学留学生センターで96年4月まで日本語教育課程コースを履修した。テキストは「新

日本語基礎」というのを使ったが、私はこれをモンゴル語に訳して提出した。修了式には16人の留学生を代表して挨拶をした。96年4月から山形大学教育学部の増田教授の下で指導を受け、教授の了解を得られなかったまま山形大学の大学院修士課程の入学試験を受けた。11人受験し5人合格したが、外国人では私一人が受かった。とにかく97年3月には国費留学生の身分が切れるので私は必死だった。それに96年3月に家族（妻と娘4人）を呼んだのでどうしても大学院に入らなければならなかった。受験科目は物理、教育学、英語、面接だった。物理の出題は難しかったが、これを解くことが出来たし、英語は物質の三態変化についてだったのでこれもよかった。面接官は物理の学科長だったのでこれも幸いした。かくして97年4月から山形大学の大学院（物理教育）に私費留学生として入った。

山形大の大学院（修士課程）では「戦後日本の物理教育の展開」というテーマで修士論文を書いた。戦後6回の学習指導要領の変化を高校物理教科で追い、その変化の理由や検定の実態、教科書分析などもあわせて実施し、モンゴルと比較した。修士課程には97年4月から2年間いた。そのあと博士課程に進みたかったが山形大にはなかったので東北大学教育学研究科博士課程への編入学試験を受験した。東北大では外国人留学生の博士課程への編入制度はないので修士課程からやり直せ、と水原教授に言われたが何とか日本人と一緒に受験させてもらった。10人受験し4-5人入ったが、私の場合修士論文を認められ合格できた。博士課程のテーマは「モンゴルにおける高校カリキュラムの開発」とした。日本の場合初等・中等教育は12年制（6・3・3）であるが、モンゴルは10年制（4・4・2）で、やっと2006年9月より11年制（5・4・2）に移行した。とはいえ高校教育は依然として2年制で、その内容も10年制の時と同じだ。これではモンゴルの高校教育ひいては大学教育の質も低く、高校教育を3年制にすることがモンゴルの課題だと私は考えて、3年制の新モンゴル高校を創った。私は日本、アメリカ、ロシアの12年制学校のカリキュラムを参考にして、3年制の高校カリキュラムを作り、それを新モンゴル高校で実践し、検証している。特に日本のセンター試験（平成11年度、物理・化学・数学）を本校でも実施した。その結果モンゴルの生徒の成績が悪いことがわかった。そこで私は日本の大学進学校のカリキュラムを参考にして、それらを取り入れた3年制の新カリキュラムを作り、もっか検証している。こうした本校での取り組みを分析し、その成果を含めて博士論文にまとめている。

私の娘のうち、長女は山形西高校を出て東北大の法学部に入った。現在モンゴルの国会議員の秘書をしている。2女は日本の国立大の4年生で経済を専攻し、3女は横浜国立大の3年で教育を専攻している。この二人はもっか日本にいる。4女は高校3年で新モンゴル高校で勉強中だ。この3人はいずれも日本の高等学校での就学経験を持っている。私は子供たちの学校のPTAの会員として時々学校を訪問し、授業なども見た。プリント教材ももらい、これらは参考になった。2002年4月に私は帰国し、新モンゴル高校を作った。

28 ミジド (Lodoisambuu MIJID ダルハン・ナラン学校理事長)

私は1947年ザブハンに生まれた。小学校はウランバートルの第23学校に入った。これは8年制学校で、ここを卒業し通信テクニカルスクール（今の鉄道カレッジ）に入った。ここを優秀な成績で卒業すると大学進学ができた。私はこの資格を取った。しかしモンゴルの大学には進まないで、レニングラードの電気通信大学に留学した。1965年から70年までだった。そこで赤いデイブローマ（最優秀成績）をもらい帰国した。行き先は革命党の中央委員会が決めた。

私はモンゴル国立大の通信電気学部の教員になった。当時としては初めての専門分野の教員だった。そして初めての卒業生を出した。

ロシアから帰国後2年間かけて教員免許状を取得した。ボルという先生が初めて教員指導法を教えた。ここから私は教育の分野に入った。1972年にはポリテクニク大学を作り、通信研究室長になった。73年には中学校・職業学校・大学・通信教育実習センターをつくり、どの学校の生徒でも平等にこのセンターを利用できるようにした。このとき国連の国際通信連盟に寄付を申請し、それがとおり私は実習センターの長になった。これが元になって現在の国立通信情報技術大学になった。私はこの創設者になった。

1982年には国立のモンゴル電気通信政策委員会の委員長になった。全国に電気関係の工場をつくった。89年には“MONEL”をつくり、その工場長にもなった。自由時間には情報大学で講義もした。しかし91年になりMONELは廃止された。

90年以降私は個人で電気関係工場“TANA”を作った。ここで乾電池やテレビを作った。95年にはアメリカのWorld Space Comp.のアジア・スペース会社の東アジア担当のジェネラル・ディレクターになった。またモンゴル事務所長もした。4年間勤め、アジア諸国をまわった。日本、タイ、フィリピンなどに行った。

2001年からはモンゴルIQセンターのコンサルタント教員になった。モンゴルの中央と北部を担当し、幼稚園から大学の教員を相手にした。2年間この仕事をした。この仕事を通して私はモンゴルの教育についてあまりに気に入らない事が多いことに気づいた。私はこれまでにいろいろな国の教育を見てきた。それらと比べてもモンゴルの教育は気に入らなかった。

私の父母は67年から87年までチェコのモンゴル大使館に勤めていた。私の兄弟もそこで働いていた。私もよくチェコへ行った。私が通信教育センター長の頃（73年以降）ヨーロッパの教育制度を調査した。ドイツには79年や80年代初めに行った。こうした私の経験に比べてもモンゴルの教育は気に入らなかった。だから私は日本語学校を自分でつくった。人からは「なぜ日本語学校をつくったのか」と聞かれた。アジア諸国を回ったとき日本の指導法が一番おもしろかった。中国やシンガポールも日本の教育を入れていた。日本の教育はいろいろな国のモデルになっていた。私はモンゴルの国民を働き者にしたかった。先生を通して子供は社会に出て行く。これに適していたのが日本の教育だった。

社会主義時代と市場経済の教育の違いは大きい。モンゴルの私立学校の教育の質は上がった。これに比べ国立学校の方は社会主義時代よりも悪くなった。理由は1クラスの生徒数が多いし、教員の質が悪化した。教育が市場化された。成績や評価が市場化され、不合格の子でもお金を出せば合格になる。国立大学にもこの傾向はあるが私大にも最近現れている。今の教育を変えようと思えば、教員全体を変えなければ駄目だ。社会主義時代のベテラン教師を呼び返すか、全く若い教師を育てるかしないと駄目だ。

私がナラン学校をつくったとき、モンゴル人の教師がいた。学校の方針に賛成したが、そのレベルを達成できなかった。責任感がなかったし知識も乏しかった。また教師の“心”がなかった。モンゴルの労働法では1日8時間勤務となっている。しかし教師は1日3時間やれば学校を引き上げてしまう。学校教育法では1週間19時間勤務となっている。これでは教員の質は悪化してしまう。教員の給料は安い。しかし週19時間の勤務なら今の給料のままでいい。労働法の基準に従えば現行給料では安すぎる。私の学校には今日本人教師6人いるが、1ヶ月一人300-350ドル使っている。給料は100ドルだ。アパート・食費代・交通費等はこちら

で負担している。こうしたお金をモンゴル人教師に使うと思えば使える。しかしまだむりだ。教師の自己学習意識がまだ生まれていない。

教員養成大学にも問題がある。教員再教育研修の質が悪い。お金を集める事に集中している。お金を作るための再教育では駄目だ。学校現場には役に立たない。国立学校を民営化すれば、質が上がるかもしれない。しかし管理職の質が悪い。校長・教頭や経験積んだ人を退職させてしまう。教員は社会と一緒に開発する必要がある。生涯教育が必要だ。

いい学校には親はお金を出すと思う。私立学校が増えると質の競争が始まる。私は他の学校と競争するつもりはない。しかし今私が経営しているナラン学校を世間に知らせないといけないと思う。ウランバートルでは日本語能力検定試験をやっている。ダルハンでもこれをやりたい。これをやると生徒も先生も頑張る。

カリキュラムがあれば教育できるわけではない。実践的教育はそれでは不十分だ。今は試験のやり方が問題だ。試験だけで学校や教師を評価している。もっと時間をかけて、たとえば1-2年単位で学校を評価しないとイケない。今は教師のシラバスを見て学校を評価している。教師が子供をどう指導しているか、子供の成績は上がっているか、などを見ない。それに学校評価を教育局や教育省がしている。これはまずい。

教員の授業指導のレベルが低い。子供との対話能力が低い。教員養成大学のやり方が古いからだ。社会主義時代の実践的教師から学ぶことができると思う。社会主義時代の教師は古い、と見てしまう。これは良くない。私大を作っている人には社会主義時代のいい人が多い。優秀な教師を日本に送ること。国立学校のいい教師を日本に送って鍛える事が大事だ。高校の教育については、特に選択科目を増やさないとイケない。

Ⅳ 職業技術学校改革の沿革と関係者の証言

1 職業技術学校改革の沿革

(1) 1990年以前の技術職業教育（中等教育）

職業技術学校（Vocational and Technical School）がはじめて教育統計に表れるのは、1965年である。当時の学校の名称は職業訓練生産センター（Vocational Training & Production Center）といい、略称T P Cと言った。1965年10校（生徒数4,761）、1975年34校（同13,483）、1985年40校（同27,718）、1989年46校（同34,137）と拡張した。1976年までは各センターは専門分野別に関係省庁に付属する機関であったが、76年以降人民教育省の所管となる。また1975年以降は普通中等教育も提供するようになる。就学年数は大体2年で、普通高校の2年制に対応していた。学生の多くは中学校を卒業後T P Cに入学した。

Foundation of Education Sector in Mongolia and its Development in 80 Years

(2) 1990年代の技術職業教育（中等教育）の状況

90年代のT P Cは急速に縮小した。90年に学校数は40、生徒数29,067人であったが、94年には学校数は37、生徒数は7,555人となり、生徒数で最低に落ち込んだ。これは89年の生徒数の22%に過ぎない。2000年には学校数は36、生徒数は12,177人へと多少回復するが、それでも生徒数では89年の36%に過ぎない。中等職業学校卒業後ほぼ2年間の継続教育（Postsecondary Vocational School）を受ける学生をみると、1990年以前もっとも学生数の多

かったのは1987年の23,992人だったが、これが95年に5,584人、2000年に4,224人へと減少する(87年の17%)。これらの学生は短大卒に相当し、Diplomaの学位を取得するが、この層で見ても職業技術教育の後退が著しいことがわかる。

(3) 1993年時点での職業技術教育の状況

90年以降モンゴル社会は市場経済に移り、人材開発は従来型の国による統制方式とは異なり、労働市場の不安定なニーズに対応しなければならなくなった。従来もそうであったが、この時期の職業技術教育は、中等学校、中等後学校および高等教育機関で実施された。労働市場における労働力は、非熟練工(operative)、テクニシャン(technician)、semi-professional、エンジニア(degree level)の4階層からなっており、それに対応して学校は、Training/Production Center (TPC)、Step School、School/College、Universityの4つの階層から成っている。

TPCには普通学校の第8学年から入学でき、日本の職業高校に相当するが、就学機関は2年が多い。4つの学校はそれぞれ下の学校を卒業し上級学校へと進学できるが、入学学年はそれまでの就学期間がカウントされるので途中学年への進学となる。普通学校の第10学年卒業生(高校卒)はCollegeおよびUniversityに入る資格を持つが、希望すればTPCの第1学年に入ることもできる。

TPCはその内部にレベル1(1-2年)、レベル2(2-3.5年)、レベル3の3種類の課程がある。レベル1は普通教育科目が不足するので普通高校卒の資格は取れない。レベル2・3の学校は通常レベル1の課程を内部に持っており、終了後レベル2および3の課程に進む。このレベル2・3の課程は中等後教育機関に相当し、テクニシャンやセミプロの労働力を供給する。Step Schoolは、このレベルの学校に相当するので、Step TPCという。1993年の統計によると、レベル1のTPCは22校ある。レベル2は5校、レベル3は4校となる。

Mongolia Education and Human Resource Sector Review, Chapter 6, 1993. 8. 1

(4) 1994年マスタープランの職業技術教育計画 (Vocational Technical Education)

ここに言うVocational Education(職業教育)と、Technical Education(技術教育)とは明らかに違った内容をもつ。職業教育は、「低レベルの職人や商売のスキルを目指す訓練」であり、技術教育は「より進んだスキルや知識の習得を目指したハイレベルの訓練で職業訓練だけでなくアカデミックな内容の訓練をも含む」ものである。前者は工員や職人を養成するが、後者はテクニシャン、セミプロ、学士号をもったエンジニアなどを養成する。また前者の教育は中等教育レベルであり、後者は中等後教育レベルとなる。前者は普通中等教育の内容に職業的な要素を含めた内容であるが(2年制TPC)、後者はアカデミックな内容と専門教育を統合したものである。

このマスタープランで目指す職業技術教育と90年以前のそれとを比較すると、いくつか相違が見られる。①90年以前は専門分野が細かく分かれていたが、新しい職業技術教育は専門分野が統合されている。②90年以前は専門教育が主で一般教育科目の比重は小さかったが、90年以降は一般教育科目が重視されている。③中等教育で言うと、90年以前は職業教育と普通教育のコースは完全に分かれていたが、新しい教育では中等教育のすべての生徒に職業教育を授けることになった(第7-10学年)。④90年過ぎにそれまでは教育省の所管であった職業技術教育は、再び労働省ほかの省庁の所管に分散され、混乱をまねくことになった。①-③に

見られる新しい政策は、しかしながら90年代にはほとんど実現されなかった。

Mongolian Human Resource Development and Education Reform Project, Master Plan, 1994

(5) 「モンゴル教育セクター戦略（2000－2005）」と職業技術教育

これは2000年から2005年にかけての戦略的な教育政策を示したものである。この基本政策はアジア開発銀行の援助を得て、教育省が案を作成しモンゴル政府が承認したものである。ここには7つのサブセクターにわたって、合計23の教育戦略がまとめられている。23の戦略の各項目については第1位から第10位までの優先順位がふられている。この中で技術教育職業訓練(Technical Education and Vocational Training, TEVT)は第3位の位置づけを獲得している。これは普通教育や高等教育よりも優先順位は高い。

とはいえTEVTの政策上の位置づけは一貫して低く、90年代には見るべき前進はなかった。この間の事情についてはたとえばADBの作成したSub-Regional Cooperation in Managing Education Reform (2002・9)の中で説明されている。そこでは「技術教育・職業訓練は労働市場のニーズを満たしていないし、このセクターの改革はあまりにも遅かったし、今でも遅い」、「同時にTEVTは労働市場の要求を満たすことに失敗している」と書かれている。この点は私の2003－05年のモンゴル調査においても、確認できた。モンゴルの教育セクターの中でもっとも遅れているのがこの分野である。

2 職業技術学校関係者の証言

二人の職業技術教育関係者を紹介する。ウランバートルの美術工芸カレッジのユラ校長と、食品工業カレッジのバラエサム校長である。二人とも90年以前は教育省の中で職業教育担当部署にいて80年代の職業教育に取り組んできた。しかし90年以降は職業教育は完全な凋落傾向に陥り、バラエサムはモスクワに行き、ユラだけが教育省に残るが、およそ改革とは程遠い仕事になる。とはいえユラは一貫して職業教育の分野を歩き、現在は職業技術学校の全国校長協会の会長をしている。この分野は数年前よりようやく教育省の中でのプライオリティが上がってきているが、10年以上のブランクは大きい。

二つのカレッジは、職業教育の中等部の課程と中等後の専門課程および2年制の高等教育の課程(Diploma)の3つの課程を持つ学校で、日本の高専に似ている。しかしそのレベルや施設設備は遠く及ばない。市場経済に適応した人材の開発は至上命令であるにもかかわらず、やっと取り組みが開始されたところである。とはいえこのカレッジは改革の中心をなす教育機関であり、各学校がいかなる改革の構想を出すかは、それぞれの学校に荷された課題である。

29 ユラ (Jigj YURA 美術工芸カレッジ校長, モンゴル技術職業学校協会会長)

私は1951年ザブハン県西部のソングノ・ソムに生まれた。4人兄弟だったが二人は亡くなった。ウランバートルの第28学校に入学した。1969年に卒業しモンゴル国立大学の電気エンジニアリングの学科に入った。当時は5年間だった。1974年から87年までトブ県のナライハの職業学校で電気工学の教員をした。この間84－87年は教務担当の教頭だった。

87年に人民革命党の政治大学(いまの行政アカデミー)に入り、2年半勉強した。ここを出ると行政官になれた。私は90年に教育省に入った。当時教育省は人民教育省といい、普通教

育と技術職業教育の指導機関に分かれており、後者は教育研修課と指導課に分かれていた。私はこの研修課の課長に指名され、政策作りを担当した。指導課長は今の教育省で職業学校教員の再教育を担当しているツエーベルだった。指導機関の長には副大臣のアルタンゲレルが当たっていた。

しかし当時はモンゴルもペレストロイカに入っており、教育省の組織改革がその後すぐ始まった。技術職業の指導機関は廃止となり、私の下で働いていた職員は解雇された。私とツエーベルだけが教育省に残り、縮小された職業教育担当組織で働いた。組織の長はいまの副大臣のトムルオチルだった（証言2）。事務次官がその組織を指導した。

当時職業教育学校は46校あった。これをどういう風に管理するかが問題となった。基本方針としては職業分野別に職業学校を関係行政機関（省）に配分し、教育省から離してしまった。廃止された学校や統合されたものもあったし、私物化され個人の私有となった学校もあった。10年制学校になったものや、企業化されたものもあった。こうして職業学校は廃止寸前となり、教育セクターの中でもっとも悲惨な状態におかれた。私はこうした動きの中であちこちの学校に行き、学校を廃止したり、残す事を決めたり、校長を辞めさせたり代えるなど、個別の問題に対処するしかなかった。学校は壊され、器具は盗まれ、そうした壊滅状態を目の当たりにした。

私はこうした動きに反対した。なぜなら職業学校を新たに所管する関係省庁はまだ安定していない。経験のないそうした省庁では職業学校の管理は無理だ。責任は誰が持つのか。反対理由はいろいろあった。しかし時の副総理大臣のザルディハンが「責任は私がつ」と言い、実施されてしまった。彼は哲学・社会学の専門で革命党の人だったが、1年後にはカザフスタンに行ってしまう、結局責任をとらなかった。私は3年間というものを教育省で苦勞した。上から言われる事だけをやるしかなかった。

1994年3月、ウランバートルの美術工芸カレッジの校長が辞め、その後任としてこの学校の校長になった。私は現場でやりたいと思っていたのでこの要請を受けた。

1990年改革とその後の展開について触れたい。新しい社会を作ったのはよかった。社会主義国は皆同じモデルに従った。ほかの国については知らされなかった。今は世界を見る目が見えた。モンゴルでは市場経済に平和裡に移行できた。しかし急ぎすぎた。経験のないものが新しい社会を作らざるを得なかった。白いカードや青いカードを配り、みんなが分からないうちに従来の共同の資産を民営化し、株の様に売り買いし、分けあってしまった。これは残念だった。

当時の経済政策は悪かった。物を作ることだけで、後ろにいる人間の事は考えなかった。ペレストロイカが起きて職業教育を改革しようとした。しかしやり方は下手だった。工場はつぶれ、生活は駄目になった。急にすべてを民営化し社会経済は減んだ。市場経済への移行はやらざるを得なかった。しかしそのやり方を知らなかった。だから職業学校をばらばらに各省庁に配ってしまった。職業教育を改善する条件がなくなってしまった。当時の若者は市場経済への移行は楽にできると思った。ほんとはよく研究しないといけなかった。外国を見ないといけなかった。段階的に移行すべきだった。

社会主義時代特に80年代の職業学校はよかった。地域開発に貢献したし、後継者を育てた。当時は小麦なども輸出できるほどつくったし、ミルクやジャガイモなど輸入しなかった。軽工業もあり自給体制は今よりはるかにあった。市場経済に移り、農業も含めこれらが民営化され、

一人一人ばらばらにされ、小中企業の開発にも失敗した。就職先がなくなった。だから職業教育も駄目になった。これらは政策の問題だったと思う。政策がわるかったのだ。

教育省もいい政策を作らないといけなかった。しかし間違っていた。省庁に配分された職業学校の多くは統合されてしまった。地方にあった職業学校の多くは消失寸前となり、職業教育を受ける条件がなくなった。国民の多くは大学などの高等教育がいいと考えてしまった。各地方で教育を受けられなくなった国民はウランバートルなどの大学に集中し、高等教育志向一辺倒になってしまった。残された職業学校は設備もなくなり、人もなくなった。この傾向は今でもまだ続いている。

30 バラムサエ (B. BARAMSAI 食品カレッジ校長)

私は1946年アルハンガイ県北部のエルデネマンダルソムで生まれた。父母は遊牧民で当時はネグデルができる前だった。1000頭くらいの羊、ヤギ、ヤクなどを飼育していた。しかし53年頃家族が家畜を手放してウランバートルに出てきた。当時はウランバートルに来たい人は自由に移れた。首都ができつつある頃だった。

8歳でウランバートルの第16学校に入った。いま文化教育大学が入っているあのログハウスのような建物だった。そこに4年までいて、第6学校で中学を、高校は第20学校だった。テレビやラジオもなく、暇な時間が多く、ピオネルのクラブ活動もでき、勉強する時間もあった。たまには映画も見た。ピオネルは、木工、音楽、舞踊、家事などいろいろなコースがあった。ピオネルへは優秀な生徒から優先して入ることができた。けっきょくはほぼ全員が入れたが、一斉に入ったわけではないし、全員入部の組織ではなかった。ここで子供は大人になることができた。子供は自分の目的を持ち、積極的に動いた。他の生徒の模範になるようにも努力した。大人になっていくにはいい組織だった。小学校の3・4年に入り、それから第8学年頃から革命青年委員会の組織に入った。大学生になりはいった人もいる。強制加入ではない。私は第8学年で入った。約束を守る事など申請書を出して許可された。そのあとは準黨員、黨員という形で社会主義社会に受け入れられていった。黨員になれば職位もあがったし、行政職員になるには黨員にならなければいけない時代だった。私は78年に黨員になった。

中等学校時代に私は数学・物理が好きだった。しかしそれは有用性に欠け、アカデミックだった。実験室などはなく、展示資料のみだった。実験も展示の絵図で見るしかなかった。63年に国立大の物理学科に入った。ラジオ物理を専攻した。技術家庭教育を教える資格も取った。卒業後68年に通信専門教育学校の教員になった。そこでは通信教育センターの創設に関わった。ミジドさん(証言28)と一緒にだった。このセンターは当時としては技術教育の場としては全く新しい学校でユネスコの金をもらって作った。8年制学校を卒業した後の2年コースの学生(職業学校)、4年コースの学生(中等学校、テクニシアン養成コース、ディプロマを出す)、それに大学生(エンジニア養成、バチューラーを出す)の3種類の学生の実験・実習の場だった。またセンターと同居して通信教育大学ができた。センターにはこの大学だけでなく、他の国立大の学生も実習に来た。私はここで68-73年に教員を、73-83年に副センター長を、83-86年にはミジドさん(証言28)のあとセンター長をした。ユネスコに申請したプロポーザルはミジドと私とでつくり提出した。通信技術分野は当時急速に伸びた技術分野だった。

1986年から89年までは中等高等教育委員会(教育省の前身)の中の職業中等教育部長をした。ここで中等教育における職業教育の開発を担当した。この分野のニーズ調査や教育内容、

指導法などを企画計画した。バタエルデネ（証言3・14）は私の下の職員だったし、エンヘトブシンは中等高等教育委員会の副委員長だった。

1989年に入り私はロシア・ウクライナのキエフに移った。モンゴル留学生の面倒をみる総領事館があり、30箇所2,000人の留学生の面倒を見た。私はこうした外国での活動をしたかったので申請書を出し、革命党委員会の面接を受けた。バタムンフがリーダーで、革命党の立場で指導するようと言われた。しかしペレストロイカが進み、ウクライナはロシアから独立した。この頃はロシアやモスクワよりウクライナの方が生活しやすかったし、充実していた。89年当時ソ連にはほぼ1万人のモンゴル留学生がいて、そのうち2,000人がウクライナにいた。ウクライナの独立は共産党ではなく民主党が中心母体になり、新政府も民主党だった。留学生はこうした政治の変化とは無関係に学習中心の生活をしていて、その生活保障や社会保障などが喫緊の問題となった。ウクライナでは93年まではまだ大学のほうで奨学金を継続して出していたが、それ以後は出せなくなった。

93-98年に私はモスクワに移った。モンゴル教育省の代表としてモスクワのモンゴル大使館に勤務した。94年以降はそれまでにあったモンゴル留学生に奨学金を出す契約が破棄され、奨学金を出せなくなった。新ロシアは契約の相手にはならないというのが理由だった。留学生の奨学金がモンゴル政府の負担となり、教育省、産業省、外務省が協定し、留学生の社会保障問題を担当することになった。ロシアとモンゴルとの間に通商をやり、そのお金から奨学金や現物を支給した。大変な時期だった。

98年に帰国し、この食品カレッジの校長になった。当時は“段階的食料職業学校”といって300人の学生がいた。今は1,700人で、中卒後3年制の中等職業技術者（テクニシャン）の養成コース（1,000人）と、このコースの卒業生及び高校卒業生を対象とするバチェラー・コース（700人）とからなっている。このうちバチェラー・コースは98年にはじめて受け入れた。ディプローマ（短大相当）を出す事もできる。

このカレッジの誇りは学生全員を就職させることだ。エンジニアとテクニシャンの両方を育てているが、テクニシャンも就職できる。これが重要な目的で、科学技術大学とは違う点だ。卒業生の手が優れている。有用性に優れていて、工場が採用したがっている。すでに実習中に就職先が決まる。

とはいえ学校の物的条件はよくない。これをよくするためにいま大工事をしている。多くの実験室を整備し、大きくしている。分野はICT、語学特に英語のラボ、化学・バイオ・食品加工の分野だ。今回札幌から送ってもらった調理台6台も非常に助かっている。新しいラボができ次第そこに入れる。中等レベルでは4割が食料加工のテクニシャンとなり、カレッジレベルでは3割が食料加工技術の習得をしており、調理台は調理実習や実験に使える。

今回わがカレッジは民営化の方向で改革が検討されている。これはマネジメンの民営化でそのためのワーキンググループを私が企画してつくった。学校の収入も安定してきており、物的的に充実する条件ができている。家畜農場もウランバートルから90キロのところにある。羊・ヤギ600頭、乳牛20頭いる。32キロのところには鶏、豚などの農場もつくった。これらから肉や乳製品の加工をする。今後ぜひ日本との人的・物的交流、情報交流を盛んにしたい。研究者や教師の交流が一番大事だ。物的には分析機器が足りない。日本モンゴル教育交流協会にぜひ協力していただきたい。